

第8節 中原4号墳から出土した生産用具が提起する問題

鈴木 一有

はじめに

中原4号墳は静岡県富士市に築かれた直径8mの円墳であり、未盗掘の無袖横穴式石室から装身具、刀剣、鉄鏃、馬具、須恵器とともに、豊富な生産用具が出土した。その内訳は、刀子4点(註1)、斧3点、鉋^{やりがんなのみ}5点、鑿^{かなはし}1点、鎌3点、鍬鋤先4点、砥石2点、鉄鉗^{じょうし}1点である。農工具と共伴して出土した針14点以上(註2)や鑢子^{じょうし}1点も関連遺物に加えることが許されれば、本墳から出土した生産用具は実に10種類38点を数える。一般的に生産用具の副葬が衰退する古墳時代後期において、この種類と量は全国的にみても注目する多さといえよう。本稿では、中原4号墳から出土した生産用具の位置づけを明確にし、それらが本墳に一括して副葬された意義にふれ、被葬者の性格に迫ることを目的としたい。

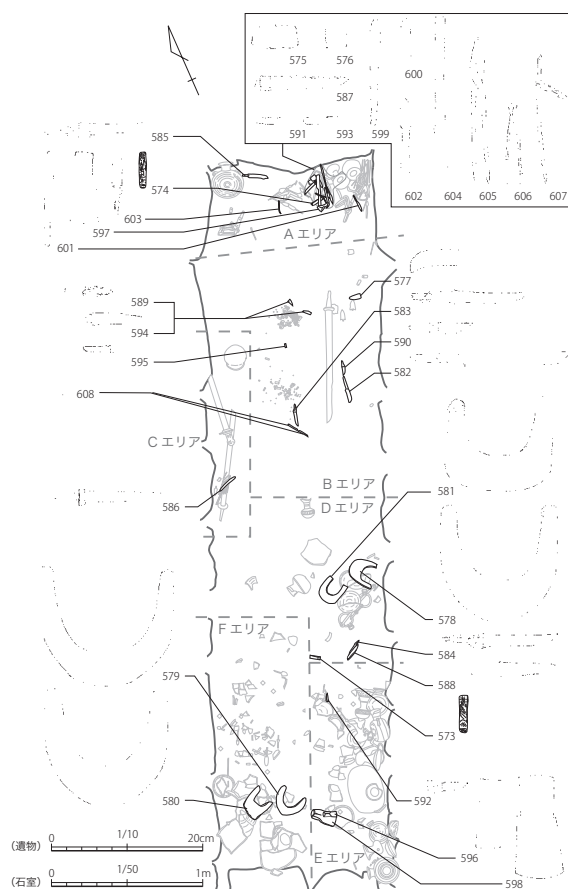
1 生産用具副葬の意義をめぐる解釈

古墳出土の農工具については、情報が豊富な前・中期を中心に型式学的な検討が進められるとともに、副葬する意味についての考究が深められてきた。かつて小林行雄は、古墳出土農工具を古墳被葬者である首長が祭祀の場を調整する建築用具と捉え、その副葬行為は被葬者の司祭的な性格を伝えるものと考えた(小林1961)。古墳出土農工具の用途を建築用具に限定することは、その後の研究で留保されたが、農工具を神まつりの用具とみる考えは引き継がれ、石製模造品を含んだ総合的な検討が加えられた。

寺沢知子は、前・中期古墳に副葬された鉄製農工具の組合せや出土状態を検討し、副葬された農工具を首長が担う農耕儀礼の執行権を示すものと解釈した(寺沢1979)。寺沢は農工具を用いた祭儀を、政治的紐帯を示す儀礼として捉え、前期には倭王権中枢から地域首長へと儀礼の情報を与えることで定着し、中期にはその祭儀が定式化、やがて地域性が発露するという見通しを示した。白石太一郎も、農工具を象った石製模造品の分析を通じ、副葬農工具は農耕儀礼を実修する司祭者(首長)が用いる神まつりの道具と評価した(白石1985)。広瀬和雄は古墳副葬農工具について田畠を切り開く勧農の

象徴物と捉え、共同体を維持繁栄させる首長の役割を示す財の一つとみなす(広瀬2003)。

こうした前中期古墳にみられた祭儀の内容は後期になると著しく変容する。白石は奈良県藤ノ木古墳から出土した農工具の分析を通じて、古墳時代後期における農工具副葬の意義を探り、6世紀以降、倭王権中枢の限られた階層が前期以来の農耕儀礼の司祭者としての性格を濃厚に残すいっぽうで、地方を含め多くの首長層は農耕儀礼にあまり拘泥なくなると捉えた(白石1997)。白石の論考は国家的祭祀を担う藤ノ木古墳被葬者の特殊な性格を明らかにすることに主眼をおいたものであったが、同時に古墳時代後期における農工具を用いた祭祀の変容過程を示した点で、本稿の目的と触れ合う部分が多い。



第206図 生産用具等出土状況図

古墳から出土する農工具の評価については、寺沢や白石とはやや異なる視点も示されている。関川尚功は副葬農工具と古墳造営に伴う祭儀や武器との関係に注目し（関川 1987）、田中新史は埋葬施設以外から出土する農工具について、古墳造営に伴う地鎮祭祀との関連を指摘した（田中 1994・1995）。古墳に副葬される農工具は、漁具や、狩猟具と関連がある平根系鉄鏃と共伴することを考慮すると、一義的には生産用具としての性格をもつものとみられる。しかし、関川や田中が示す農工具の性格は、寺沢や白石が評価した農工具副葬の意義と背反するものではなく、むしろ生産用具を用いた祭祀の具体的な場面や、神まつりの多様性を示したといえる。古墳に埋納される農工具の中には、農耕儀礼に留まらず、木器の製作や建物の建築、さらには、土木、軍事などにかかわる象徴的意味も含まれると考えられよう。

本稿で取り扱う古墳時代後期の様相は、古墳時代前期から中期へと継承された農工具祭祀の変容過程をうかがう上でも重要である。近年、古墳時代後期に副葬された農工具について、地域ごとに検討が深められている（柳沢 1994、武田 2003、十亀ほか 2013、松浦 2014）。これらの研究は、各地域における副葬行為の実態や時間的な推移を明らかにしており、地域の枠をこえた農工具副葬の総合的理解を進める上で大きな助けになる。

こうした問題意識の中で、改めて中原 4 号墳の事例に注目すると、農工具以外にも鉄鉋や針・鐮子といった、その他の生産用具とみられる製品が共伴している点が注目できる。鉄鉋は、鍛冶具の最も基層的な用具として注目されている（潮見 1981、松井 1991、花田 2002）。その副葬行為についても、鉄器生産を統括・管理する首長の性格や、鉄器生産に直接かかわる渡来系集団の職能を表すものと捉えられている。村上恭通は 5 世紀から 6 世紀における日本列島内での鉄器生産の受容過程とかかわり、北部九州や岡山県域、奈良県域、東日本といった地域の違いが鉄鉋の副葬行為に反映されていると捉えた（村上 2007、pp.244-255）。生産用具副葬の変容過程と地域性の発露が指摘されたことは、本稿の内容とかかわる重要な論点といえる。

古墳に副葬される針についても、全国的な集成作業（楠本編 1986、大谷 2012）をふまえ、その副葬の意義にかかわる検討が進みつつある。生産用具の副葬行為をその用具を用いた手工業生産と関連づける文脈に沿って解

釈すれば、針の副葬も布・皮革製品の生産と関わる表象行為と捉えることができるだろう。

このように、中原 4 号墳から出土した生産用具は、農工具副葬の変容過程にある 6 世紀の実例を具体的に示すだけでなく、鉄器生産や布・革製品の生産ともかわり、後期古墳における手工業生産用具の副葬行為の意味を総体的に分析すべきことを伝えている。以下、未盗掘の本墳にかかわる出土位置などの情報整理と個別の遺物にかかわる検討を基礎的作業として行い、これら生産用具副葬の意義に触れていきたい。

2 中原 4 号墳における生産用具の副葬

出土位置 農工具をはじめとした生産用具は中原 4 号墳の石室内のほぼ全域から出土しているが、その出土位置には種類の偏りが看取できる（第 206 図）。最も生産用具がまとまっているのが、奥壁に近い A エリアで、刀子 2 点以上、斧 2 点、鉋 5 点、鑿 1 点、鎌 3 点、砥石 1 点、鉄鉋 1 点、針 14 点以上、鐮子 1 点が集中する。これらの遺物群は、追葬などによる二次的な移動を考慮しうが、一括性が高い集積であり、副葬時期が同一の生産用具が一箇所に集められたものとみなせるだろう（註 3）。

初葬の遺体（本書第 4 章第 3 節、田村論考、埋葬①）が想定できる B エリアからは、刀子 4 点以上（582、583、590、594 など）、鎌 1 点（577）、針 1 点（608）が出土した。鎌は破損が著しく小片化しているが、この地点で出土していることは看過できない。針についても一点のみであるが、同様である。これらの遺物は、本墳における生産用具の本来的な副葬位置を示している可能性があるだろう。

いっぽう、4 点分の刀子については、想定しうる被葬者の位置を考慮して、その性格や用途を判断する必要がある。刀子については工具以外に、被葬者の装着物や、儀礼に伴って遺体に沿わせたものが含まれる可能性がある。とくに 2 点の刀子（582、590）は、原位置を留めているとみられる刀（418）と近接して出土していることを考慮すると、被葬者に直接かかわる遺物とみなすことができるだろう。

追葬の遺体（本書第 4 章第 3 節、田村論考、埋葬②）が想定できる C エリアからも 1 点の刀子（586）が出土している。C エリアで共伴する副葬品は少なく、出土遺

物は追葬者に伴うものに限定しうる可能性が高い。他の生産用具が共伴せず、1点の刀子のみが出土していることをふまえると、この刀子は農工具祭祀に用いた生産用具というよりも、追葬者に直接かかわる装着物などの一つと捉えるほうがよいであろう。

開口部に近いD～Fエリアからは、鍬鋤先4点（578～581）と斧2点（596、598）、刀子3点（584、588、592）、砥石1点（573）が出土している。D～Fエリアでは須恵器破片の接合関係が相互に認められることから、副葬時に開口部付近のE・Fエリアに置かれていたものが追葬時の片付けによって一部Dエリアに移動したものと解釈できる。鍬鋤先2点（578、581）や刀子2点（588、592）はその蓋然性が高いとみてよいだろう。鍬鋤先は奥壁近くのAエリアの生産用具集積にはみられず、大小2点の斧（596、598）もAエリアにはみられない組合せである。これらの農工具は地鎮などにかかわる土木用具（田中1994・1995）など、使用された儀礼の場面や性格がAエリアで出土した生産用具と異なっていた可能性も考慮してよいだろう（註4）。

副葬時期 生産用具の副葬の時期を考えるにあたっては、各遺物の編年的位置づけを重視すべきである。しかし、古墳時代後期の生産用具については、形態変化が不明確で詳細な検討にこたえられない。ここでは、須恵器や武器・馬具などの形態差から明らかにする副葬の段階把握から、生産用具の副葬時期について考えておきたい。初葬の被葬者は古相の武器が集まるBエリアに想定でき、奥壁よりのAエリアについても、須恵器や鉄鏃の特徴から、初葬に伴う副葬品の集積と判断できる。同一地点から出土した生産用具も初葬時の副葬品と理解してよいだろう。

また、開口部に近いD～Fエリアについても、古相の須恵器が数多く含まれる。初葬時の副葬品として開口部付近（E、Fエリア）にまとまっていたものが、追葬時に一部Dエリアに移動したものが主体を占めると捉えられよう。鍬鋤先や大小の斧など、Aエリアで確認できる生産用具と補完的な組成であることから、このエリアで出土した農工具も初葬時に伴うと捉えるのが妥当といえる。以上のことから、中原4号墳から出土した生産用具は、その多くが初葬時の副葬品である蓋然性が高いと判断できる。その時期は、初葬時に副葬されたとみられる須恵器の時期、すなわちTK43型式期（中でも

新相期）と捉えられる。実年代では、6世紀後葉に相当する。追葬に伴うものとして、若干の刀子などがあげられるが、さしあたり本墳の生産用具の組成を考えるには大きな違いが生じない程度の量といえるだろう。

3 中原4号墳出土生産用具の特徴

次に中原4号墳から出土した生産用具の特徴について触れておこう。

刀子 中原4号墳からは刃部破片で数えて総数10点の刀子が出土している。確認できるものはすべて刃側と背側の双方に関がある両関造りであり、鋸をもつものが4点（584、585、586、587）ある。刀子の出土位置はA～Eのエリアに分散している。被葬者が想定できるB・Cエリアからの出土品については、先述の通り、工具以外の用途を考慮してよい。また、本墳から出土した刀子の柄には木製のものと鹿角製のものの2種が知られる。鹿角装刀子はBエリアから出土した583と、Eエリアから出土した592であり、他の工具と出土位置が異なる。また小型の刀子590、592、594は刃部の研ぎ減りが顕著で、590や592は木柄の外側に別素材の柄がつけられている。長期間にわたり使い込まれたものとみられ、出土位置も他の工具とは異なるB・Eエリアにあたる。以上のことから、B・C・Eエリアから出土した、大型品582～584、586、および小型で研ぎ減りが顕著な590、592、594（鹿角柄刀子583、592を含む）は、被葬者佩用品などとして工具から分離して捉えておきたい。

工具として捉えうる刀子は、奥壁よりのAエリアから出土した585、587とDエリアから出土した584、588の4点である。以下、本墳から出土した工具としての刀子は4点として論を進める（註5）。4点の刀子はいずれも刃部長7.4～10.2cmほどの中型品で、鋸を備えるものが3点ある。

斧 有袋鉄斧が3点出土している。全長9.3cmの小型品（597）が奥壁よりのAエリアから、全長9.0cmの小型品（596）と全長13.5cmの大型品（598）が開口部付近のEエリアから出土している。大きさは異なるが、いずれも実用品とみてよい。出土位置が異なる前者と後者は、使用する儀礼の場面などが異なる可能性がある。小型の鉄斧2点は肩部が比較的不明瞭なことに對し、大型の1点は肩部の角が明瞭である。また、前者は袋

部の合わせ目が明確であることに對し、後者は袋部の合わせ目が不明瞭である。前者は刃部と一体になった原形から袋部を造り出すことに對し、後者は別作りの刃部と袋部を鍛接するなど、袋部を造り出す製作技術が異なるとみられる。こうした形態差は、伐採用、加工用といった斧の具体的な用途の違いに起因する可能性があり、柄の付け方も異なっていた可能性が高い。Eエリアから出土した大小の斧(596、598)は、縦斧と横斧といった柄の付け方が異なる二つの斧の組合せであった可能性がある。

鉋 莖式の鉋が5点確認できる。5点ともに奥壁よりのAエリアから出土した。いずれも柳葉状の刃部をもち、緩やかに反り上がる。刃部の断面は片鎚造りで、裏すきはみられない。刃部と莖の間の関には、角関(602、603)、ナデ関(601)、無関(599)などの多様性が認められる。全長が判明する個体は、全長11.1～14.2cmであり、実用的な大きさといえる。本例のような莖式の鉋は西日本を中心とした後期古墳副葬品に数多く認められる(古瀬1977)。

鑿 袋式の鑿が1点、奥壁よりのAエリアから出土した。一部に破損がみられるが、全長19cm程度に復原できる。鑿は刃部形態(刃部が広いのか狭いか、有肩か無肩かなど)や木柄との装着方法(袋式か莖式か)、全体の寸法などで細分しようが(古瀬1991)、本例のような無肩で袋式の鑿は、古墳時代後期以降に増加する。寸法についても後期古墳出土例は全長20cm前後のものが一定量あることをふまえると、本例は古墳時代の実用的な鑿として一般的な形態、大きさであるといえるだろう。

鎌 鎌は完形品がなく、すべて破片の状態で出土した。基部が3点、刃部先端が1点あり、副葬数は3点以上である。3点の基部破片は奥壁よりのAエリアから出土したが、刃先の破片1点はやや離れたBエリアから出土している。先述の通り、Bエリアから出土した小破片が移動から漏れたものと解釈すると、農工具本来の副葬位置はBエリアであった可能性が考えられる。基部の形状から、3点の鎌はすべて直角鎌であることが確認できる。また、遺存している刃部先端の形状から、判明するものについては曲刃鎌であることが分かる。刃部幅は1.8～2.5cm、推定できる全長は15cm程度であり、その大きさからいずれも実用品と捉えてよいだろう。基部の折り返しの向きについては、折り返し部を上、かつ

刃部を手前に置いたとき、刃部先端が左である「甲技法」(都出1967)が2点、右である「乙技法」が1点であり、両者が混在する。

鍬 鋤先 4点ある鍬鋤先はすべてU字形鍬鋤先で、長さ12.4～15.3cm、幅13.8～17.8cmである。2点(578・581)がDエリアから、もう2点(579・580)がFエリアから出土した。Dエリアから出土した2点は、二次的に移動したとみられる須恵器に近接しており、本来、開口部付近のE・Fエリアにあったものが、追葬等に伴い移動した可能性がある。U字形鍬鋤先には、刃幅10cm以下の小型品(都出1967)が知られるが、本例はいずれもその大きさから実用品とみられる。刃部が全体的にU字形を呈するものが3点(578～580)、左右に張り出すものが1点(581)ある。形状の違いは鍬鋤の機能差を反映している可能性がある。古墳時代後期におけるU字形鍬鋤先は、奈良県を中心に小型品がみられる(坂2005)ものの、西日本地域で出土する多くは実用的な大きさの製品であり、本例もその一例に加えることができるだろう。

砥 石 本墳からは2点の砥石が出土した。奥壁よりのAエリアで他の農工具と共伴して出土した1点(574)と開口部に近いDエリアで単独で出土した1点(573)がある。石材はいずれも凝灰岩である。両者ともに全長9cmほどの小型品であり、角柱状を呈する四面すべてに顕著な使用痕がみられる。573の端部には穿孔が認められ、佩用が可能な「佩砥」(入江1998)であったとみることもできよう。また、これらの砥石は農工具の刃部を研ぎ出す用途に加え、鍛冶具である鉄鉗が出土していることから、鍛冶具を構成する道具の一つと捉えることも可能である(註6)。

鉄 鉗 奥壁よりのAエリアから農工具とともに鉄鉗が1点出土している。本例は全長19.3cmの比較的小型の製品である。鉄鉗は大きさの違いに注目することが多い。松井和幸は、全長25cm以下を小型品、25～40cmを中型品、40cm以上を大型品とし(松井1991)、加藤俊吾もおおよそ同様の見解を示している(加藤1997・1998)。いっぽう、朝鮮半島の事例については李東冠が、全長18cm以下を小型品、20～30cmを中型品、30cm以上を大型品として認識している(李2012)。

本稿では上述の研究を参考にして、全長20cm未満

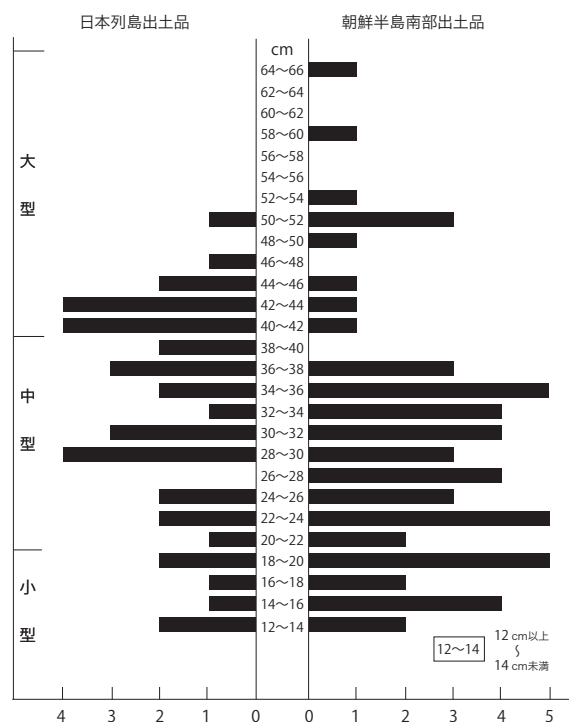
を小型品、20cm 以上 40cm 未満を中型品、40cm 以上を大型品と捉えたい（第 207 図）。この基準に照らせば、中原 4 号墳例は小型品に位置づけられる。

鉄鉗の形状については、挟み部や握り部の形状をもとに細分案が出されている。濱崎範子は、挟み部が円形を呈する A 類、挟み部が比較的長く先端を閉じたときに空間がある B 類、先端を閉じたときに空間がない C 類、挟み部や握り部の肩が張らない D 類という分類案を示した（濱崎 2008）。濱崎分類による A 類は朝鮮半島の出土品に多くみられ、B・C 類は、日朝双方に出土例がある。D 類は日本列島にのみ確認できることから、列島の独特形態である可能性がある。本例は、日朝ともに類例がある B 類に属している。

鉄鉗の大きさは金属加工で用いる工程や技術力の違いを反映したものと解釈できる。大～中型品は鍛冶用具として捉えて問題ないだろう（吉川 1991）。とくに、全長 30cm 以上の大型品や中型品の一部は、片手で扱うことができず、複数の工人がかかわる作業に使われたものと捉えられる。いっぽう、本例のような小型品は片手で扱える大きさであり、修復や簡易な加工など、より小規模な作業に使用された用具と評価できる（註 7）。

針 針は、奥壁よりの A エリアから 13 点以上（607）と、初葬者が想定できる B エリアから 1 点（608）の合計 14 点以上が出土している。本墳の事例は全長 14.1 および 17.0cm の大型品（607、608）と全長 3.5 ～ 4.0cm ほどの小型品に分けられる。前者は針孔も鮮明に確認できるが、後者は針孔の有無を含め全体形が不明瞭である。また、小型品は東になって錆着しており、糸などで束ねられていたか、何らかの容器に入れられていた可能性が高い。本例のような大型の針は、茨城県三味塚古墳出土品に類似例がある（註 8）。三味塚古墳例は、全長 15.8cm で、本体の断面形は円形、端部は方形であり、一端には孔があげられている。

全長 15cm を超えるような大型の針については儀礼用に特化したものと捉える考えがある。しかし、後述するように古墳時代の金属製針の祖形とみなせる弥生時代の骨角製針の中には全長 15cm を超える大型品が一定量認められることは留意すべきである。中原 4 号墳から出土した鉄製生産用具の殆どが実用品とみられることから考えても、本墳から出土した大型針も実用品であったと捉えておく方がよいだろう。



第 207 図 鉄鉗の全長比較

鑷子 奥壁よりの A エリアにおいて農具と共に出土している。鑷子は先端で対象物を挟む機能をもつ鉄器の総称である。形態的特徴や古墳における出土状態から、毛抜き説、刀剣や刀子の吊り金具説、馬具説など、多様な機能が推定されてきた。機能を限定する用語を避け、「鑷子状鉄製品」と呼ぶこともある（鈴木 1999、諫早 2008）。しかし、諫早直人が明確に示しているとおり、この種の鉄器は吊り金具や馬具として捉えることは困難であり、本義的に細かなものを挟む機能を果たす道具と評価しうる。

鑷子には振りを加えた棒状金具を備えるものも知られ、これらは化粧用具（毛抜き）など、属人性が高い佩用品や携行品として用いられたものが含まれる可能性が考えられる。毛抜きとしての機能が想定できる鑷子は、日本列島において古墳時代中期に出土例が増加するが、その普及には朝鮮半島からの影響があったと捉えられる。いっぽう、本例のように棒状金具が伴わず、生産用具と共に出土する事例については、皮革の毛を抜いたり、糸くずなど細かいものを摘んだりするような、生産用具の一種として捉えることも許されよう。

4 鍛冶具副葬の意義

中原4号墳からは鉄鉗が1点、出土している。鉄鉗の出土例は東海地方で唯一であり、東日本においても、類例が極めて限られる。以下、鉄鉗と関連する鍛冶具副葬の意義について整理しておきたい。

鍛冶具の種類 古墳出土の鍛冶具については、鉄器生産・加工技術の推移を直接的に示す資料として古くから注目されてきた。鉄鉗を中心に、出土地の地名表が潮見浩と和島誠一によって作成され(潮見・和島1966)、以後、新出例を加えて提示が繰り返されている(野上1968、潮見1982、松井1991、加藤1997・1998、花田2002、村上2004など)。鍛冶具の中心は、製品を挟む機能をもつ鉄鉗であり、さらに充実した組合せが見られる場合、鉄鉗、鉄鋸、鑿、鉄砧、鑪などが共伴する。砥石については、鍛冶具に限定することは難しいが、鉄製鍛冶具と共伴する事例については鍛冶関連の道具として用いられた可能性を考慮してもよいだろう。

先述のとおり、鉄鉗には全体の大小と挟み部の形状の区別があり、本稿では全長20cm未満を小型品、20cm以上40cm未満を中型品、40cm以上を大型品と捉えている。また、鉄鉗に伴う鉄鋸や鑿にも大きさの違いがある。鉄砧は、角柱状の鉄塊であるものと、本体が細長く一端が尖る小型のものがある。鑪については明確な鑪目が確認できないものが殆どであるので、その認定が難しい。しかし、本体が扁平で、「鑿」もしくは「鑿状」とされる鉄器の中には鑪が含まれる可能性がある。鑪とさ

れる鉄器は朝鮮半島での出土例が目立ち、鍛冶具と共伴する。本稿では可能な限り鑪の可能性が考えられる形状の鉄器についても取り上げておきたい。このほか、炉内の鉄滓・鉄塊や炭を掻き出すための「なゆで」「かぎやり」とみられる鉤状鉄器も福岡県広石南A4号墳例など、ごく少数ながら知られる。

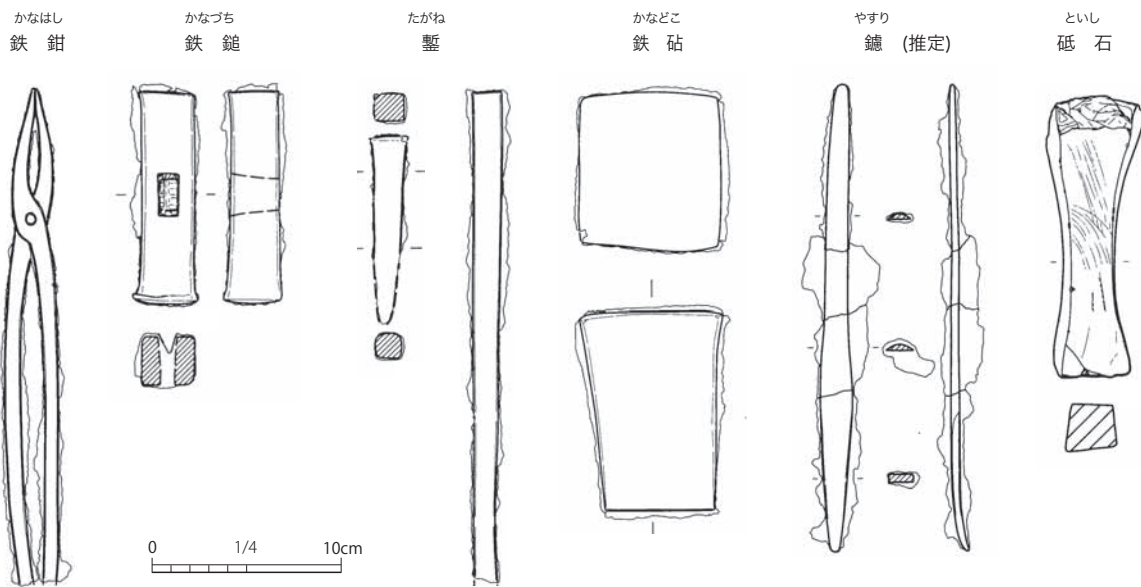
鍛冶具の組合せ 中原4号墳出土の鍛冶具組成を評価するために、鉄製鍛冶具の組合せを以下のように分類する。

A類) 4種の鉄製鍛冶具(鉄鉗、鉄鋸、鑿、鉄砧の組合せ)が揃う事例

B類) 2～3種の鉄製鍛冶具が共伴する事例

C類) 1種類の鉄製鍛冶具が出土する事例

このうち、C類は、C1類) 鉄鉗のみ、C2類) 鉄鋸のみ、C3類) 鑿のみ、C4類) 鉄砧のみ、といった細分が可能である。ただし、C2類・C4類については、確実な事例に乏しく、類型として一般化しうるか検討が必要である。また、C3類については、単体で出土する「鑿」状の鉄器を鍛冶具と限定しうるかという問題があり(村上2004、濱崎2008)、正確な評価が難しい。C類は鉄鉗のみが確認できるC1類が主体といえ、中原4号墳を含め、東日本地域の鍛冶具出土例はこの類型に限定できる。1点の鉄鉗を副葬することは、鍛冶具副葬の最も基層的な行為であると認識しうらうだろう。また、後述するように、東日本で出土する鉄鉗は小型品に限られることにも、注目しておきたい。



第208図 鍛冶具の組成(奈良県五條猫塚古墳例)

分布と推移 日本列島において鉄鉋を中心とする鍛冶具が出土しはじめるのは、古墳時代中期前葉のことである（註9）。福岡県池の上6号墳例（B類型）や兵庫県行者塚古墳例（C類型）などが、その初期の事例である。続く中期中葉には、奈良県五条猫塚古墳や岡山県随庵古墳などA類型の事例が知られ、日本列島内に本格的な鍛冶具が出現する。これら出現初期の鍛冶具副葬古墳には豊富な副葬品が伴う例が多く、その被葬者には鉄器生産を統括する渡来系の首長を想定しうる。また、池の上6号墳にみるように、鉄器生産の工人に近い階層の被葬者が想定できる事例もある。その後、中期後葉から後期にかけては中小規模古墳からの出土例が目立つ。これら鍛冶具出土古墳は北部九州をはじめ、岡山県域、奈良県域などに集中する傾向があり、鉄器生産の中心地をあとづけることができる。

朝鮮半島の鍛冶具 近年、朝鮮半島南部における鍛冶具の出土例が激増している。とくに2010年以降、全羅北道完州上雲里遺跡や、慶尚南道蔚山地域における多くの発掘調査成果が公表され、総合的な検討をする素地が整った。朝鮮半島における鍛冶具の組合せを先の分類に従って整理すると、日本列島の事例と比べて種類が充実しているA類やB類の割合が高い（第19表）。鍛冶具の副葬行為は日朝に共通し、その量や種類の違いが鉄器生産力の差を反映しているものと解釈できるだろう。朝鮮半島南部における鍛冶具副葬は、古墳時代前期に併行する時期にもみられるが、中期から後期にかけて出土例

が集中する点は、日本列島と共通する。鉄鉋をはじめ、鍛冶具個別の大きさが多様であることも留意したい。中原4号墳例のような小型品も朝鮮半島から一定量が認められるので、鉄鉋の大きさの違いは鍛冶の場面や従事者数の違いなどを反映した機能差に起因する可能性が高いとみられよう。

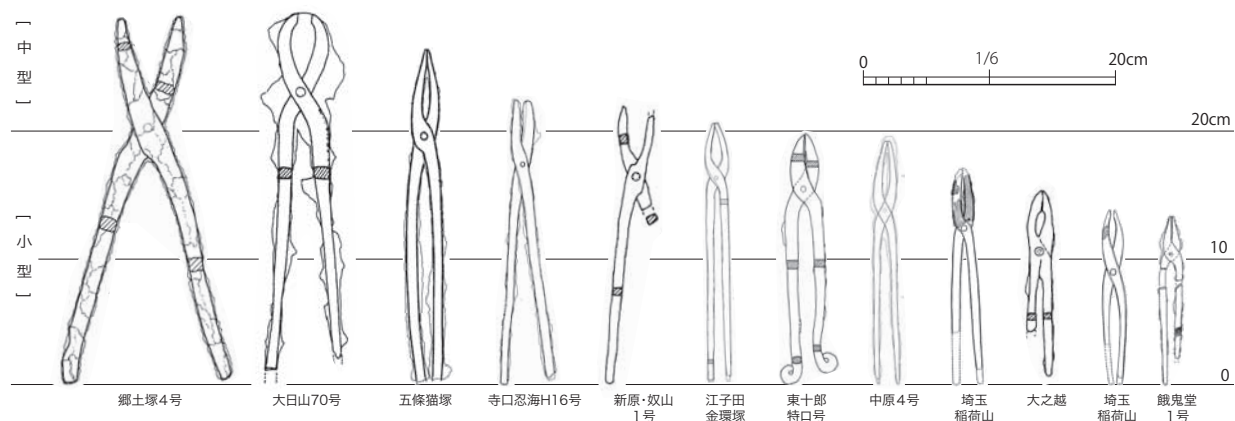
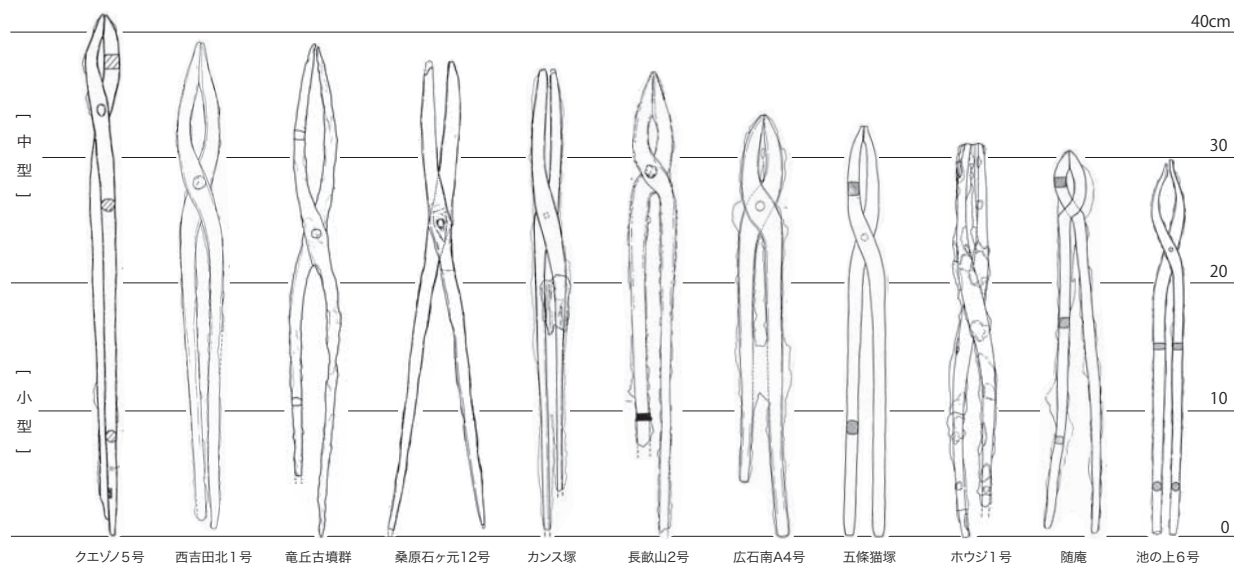
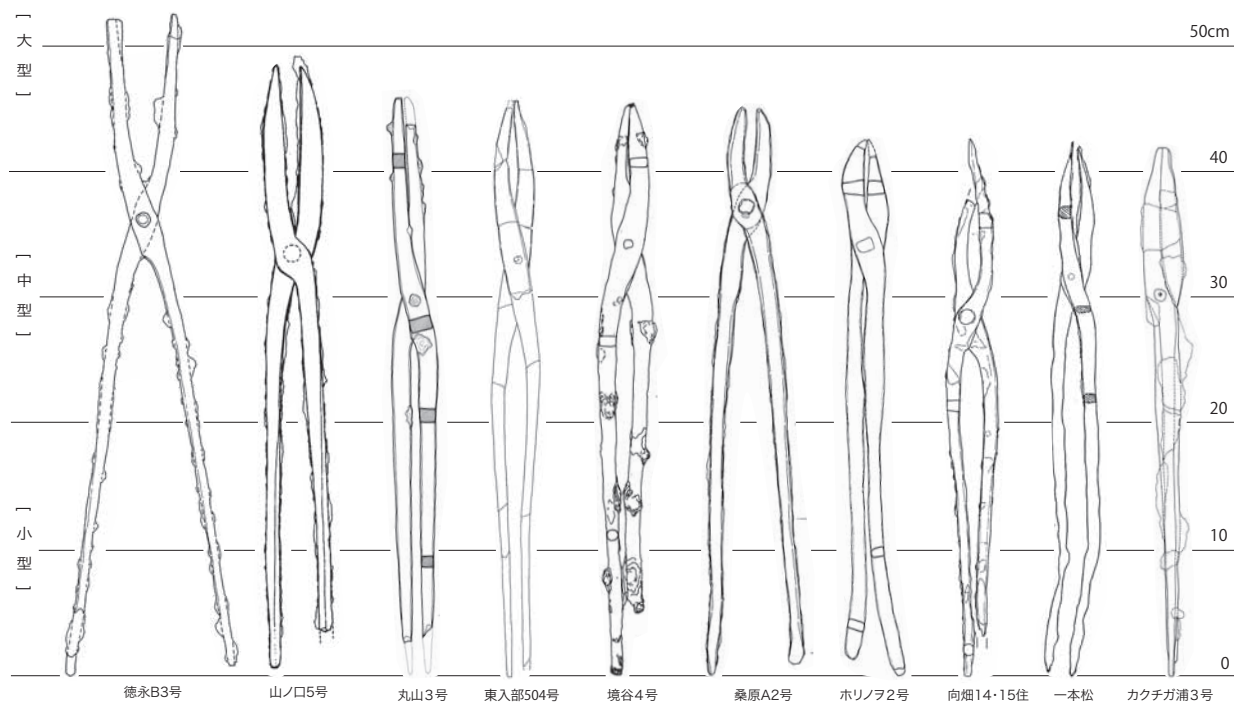
鍛冶具の出土例は、完州上雲里古墳群に集中するほか、大邱、慶山、慶州、蔚山、昌寧といった小地域ごとにまとまる傾向がある。鉄器生産の拠点に鍛冶具副葬古墳が集中すると評価できよう。特に上雲里遺跡からは、20点を数える鉄鉋が集中して出土しており、朝鮮半島の中でも突出した出土量を誇る。鉄器生産集団がかかわる墓地といえるだろう。

上雲里遺跡を除くと、朝鮮半島南部地域における鍛冶具出土古墳は、洛東江以東の地域に偏りがある点も留意したい。日本では鉄器生産の中心地として加耶地域が注目されているが、朝鮮半島南部全体と比較すれば、鍛冶具出土古墳の分布の中心は、新羅の領域にあるとみなせる（濱崎2008）。日本列島の鍛冶技術の淵源地として、新羅の領域を視野に入れた検討が求められるだろう。

鍛冶具副葬の意義 鍛冶具副葬古墳の様相を古墳の時期、出土地、出土した鍛冶具の種類などから整理すると、鉄器生産技術の伝播過程とその定着度がうかがえる。朝鮮半島における分布の核は新羅の領域を中心とした洛東江東岸域にあり、古墳時代中期前葉から中葉にかけて北部九州や岡山県域、奈良県域といった西日本地域に伝



第209図 鍛冶具の分布

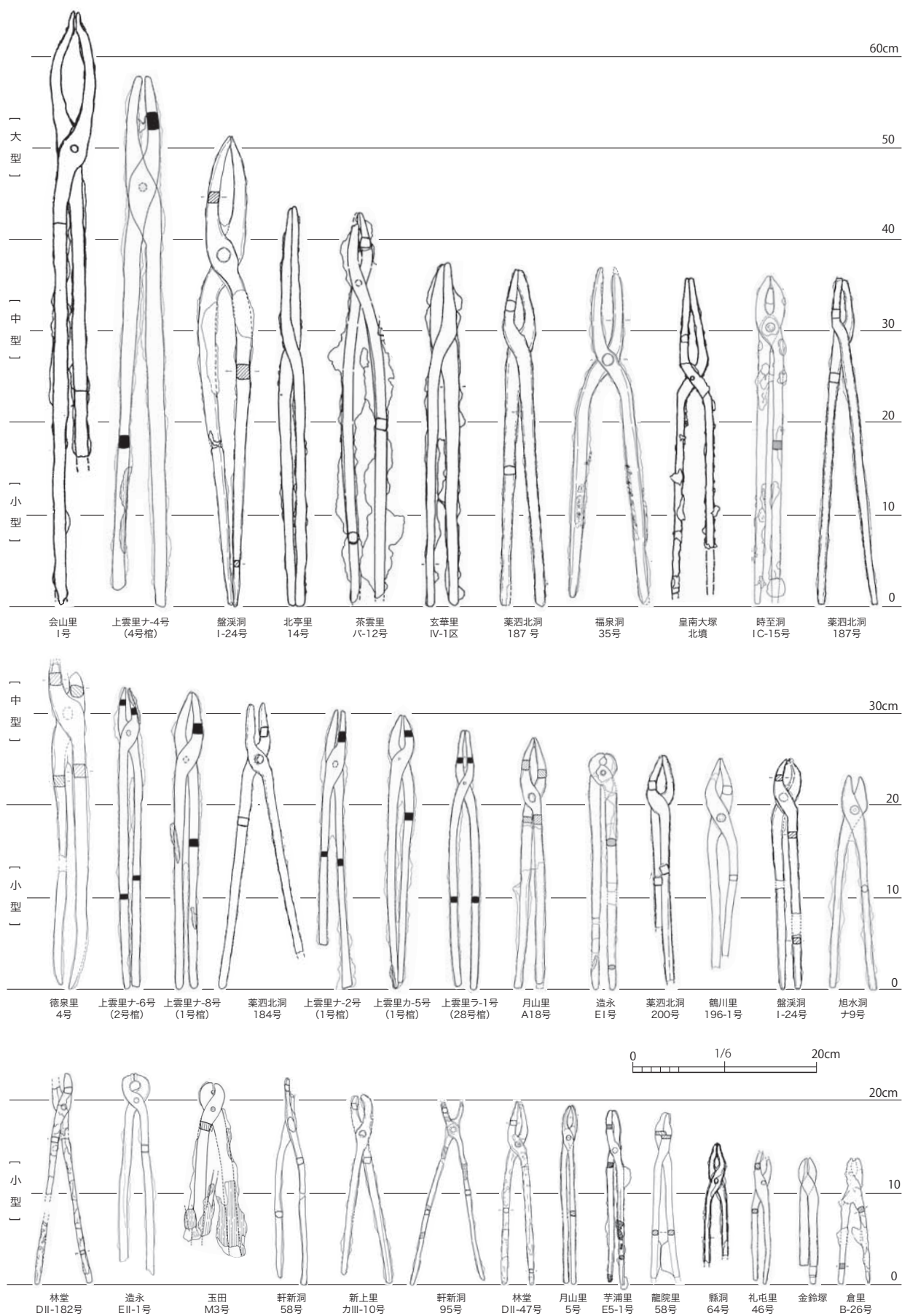


第210図 日本列島から出土した鉄鉗の諸例

第18表 日本列島における鍛冶具出土古墳

都府県	所在地	古墳名	墳形	時期	鍛冶具						その他	鉄製鍛冶具の内容		
					鉄鉗	鉄鋤	鋳	鉄砧	鋤	砥石		種	点	類型
山形県	山形市	大之越	円墳	中期	1							1	1	C 1
福島県	いわき市	餓鬼堂 1 号横穴	横穴	後期	1							1	1	C 1
群馬県	高崎市	弦巻	前方後円墳	中期	1							1	1	C 1
埼玉県	行田市	埼玉稲荷山	前方後円墳	中期	2							1	2	C 1
千葉県	市原市	江子田金環塚	前方後円墳	後期	1							1	1	C 1
福井県	美浜市	獅子塚	前方後円墳	後期	1							(1)	(1)	(C 1)
長野県	伊那市	如来堂	円墳	後期		1						(1)	(1)	(C 1)
長野県	飯田市	竜丘古墳群	不明	—	1							(1)	(1)	(C 1)
静岡県	富士市	中原 4 号	円墳	後期	1					2		1	1	C 1
京都府	京丹後市	畑大塚	円墳	後期	1							1	1	C 1
京都府	京田辺市	郷土塚 4 号	円墳	後期	1	1						2	2	B
大阪府	柏原市	雁多尾畑 9 支群 4 号	円墳	後期	1							1	1	C 1
大阪府	堺市	百舌島大塚山	前方後円墳	中期	1		1					1	1	B
兵庫県	豊岡市	ホウジ 1 号	円墳	中期	1	1	2			1		3	3	B
兵庫県	加西市	タンダ山 2 号	—	中期	1		1					2	2	B
兵庫県	加古川市	カンス塚	円墳	中期	1	1	1			1		3	3	B
兵庫県	加古川市	行者塚	前方後円墳	中期				1				1	1	C 4
奈良県	大和郡山田市	菩提寺 2 号	方墳	中期	1							(1)	(1)	(C 1)
奈良県	天理市	ホリノヲ 2 号	円墳	後期	1	1						2	2	B
奈良県	葛城市	寺口忍海 H16 号	円墳	中期	1	1	1	1		1		4	4	A
奈良県	御所市	境谷 4 号	円墳	中期	1	1	1	1				3	3	B
奈良県	高取町	イノヲク 1 号	円墳	後期	1	1	1	1				4	4	A
奈良県	五條市	五條臨塚	方墳	中期	2	3	2	1	(1)	6		4 +	8 +	A
和歌山県	和歌山市	大日山 70 号	円墳	後期	1	2	1					3	4	B
和歌山県	みなべ町	箱谷 3 号	円墳	後期	1							1	1	C 1
鳥取県	倉吉市	高畔 2 号	円墳	後期			1					1	1	C 3
岡山県	真庭市	四ツ塚 1 号	円墳	後期	1	1	1					3	3	B
岡山県	勝央町	勝央町内横穴	横穴	後期	1							(1)	(1)	(C 1)
岡山県	鏡野町	ツルギ	不明	後期	1	1	(1)					2 +	2 +	B
岡山県	津山市	長畝山 2 号	円墳	中期	1	1	1					3	3	B
岡山県	津山市	西吉田北 1 号	方墳	中期	1		1				鉄鐸	2	2	B
岡山県	総社市	随庵	円墳	中期	1	1	1	1	(1)	1		4 +	4 +	A
岡山県	岡山市	一本松	前方後円墳	中期	1	2						2	3	B
岡山県	笠岡市	竹之内	円墳	後期	1							(1)	(1)	(C 1)
広島県	安芸高田市	上野部 1 号	—	—	1							(1)	(1)	(C 1)
広島県	広島市	三王原	円墳	中期		1						(1)	(1)	(C 2)
山口県	田布施町	後井 3 号	円墳	後期	1			2		1		2	3	B
山口県	下関市	心光寺 2 号	不明	後期		1						1	1	(C 2)
香川県	三豊市	財田西	—	—	1	1				(1)		3	3	B
愛媛県	今治市	古国分	—	—	1	1						2	2	B
愛媛県	今治市	矢田大塚	(円墳)	後期	1							(1)	(1)	(C 1)
愛媛県	伊予市	猪の窪	円墳	中期			1							C 3
愛媛県	松山市	かいなご 1 号	円墳	後期		1						1	1	C 2
愛媛県	松山市	塚本 1 号	円墳	後期			2							C 3
福岡県	福津市	新原・奴山 1 号	前方後円墳	中期	1	2						2	3	B
福岡県	福津市	新原・奴山 44 号	円墳	後期			1							C 3
福岡県	福岡町	手光南 2 号	円墳	後期			1				蛇行鉄器			C 3
福岡県	福岡町	潮畑 1 号	円墳	中期			3				鉄鋌			C 3
福岡県	宗像市	平等寺原 5 号	円墳	後期	1	3						2	4	B
福岡県	宗像市	山ノ口 5 号	円墳	後期	1	3						2	4	B
福岡県	宗像市	山ノ口 6 号	円墳	後期	1	1						2	2	B
福岡県	宗像市	大井平野 1 号	円墳	前期			(1)			1		(1)	(1)	(C 3)
福岡県	古賀市	永浦 4 号	円墳	中期			1					1	1	C 3
福岡県	福岡市	クエゾノ 5 号	円墳	中期	1	1					铸造鉄斧	2	2	B
福岡県	福岡市	広石南 A4 号	円墳	後期	1	1					鉤状鉄器	2	2	B
福岡県	福岡市	桑原石ヶ元 12 号	円墳	後期	1	2	1	1				4	5	A
福岡県	福岡市	桑原 A2 号	円墳	後期	1	1						2	2	B
福岡県	福岡市	桑原 A4 号	円墳	後期	1							1	1	C 1
福岡県	福岡市	東入部 504 号	円墳	後期	1							1	1	C 1
福岡県	福岡市	梅林	前方後円墳	中～後期			1					1	1	C 3
福岡県	福岡市	徳永 B3 号	円墳	中期	1		1					(2)	(2)	(B)
福岡県	那珂川町	片縄丸ノ口 V -4 号	円墳	後期	1							1	1	C 1
福岡県	那珂川町	カクチガ浦 3 号	円墳 (墳裾)	中期	1						鉄鐸	1	1	C 1
福岡県	春日市	角田 2 号	円墳	後期		1						1	1	C 2
福岡県	筑前町	赤坂鳥毛 1 号	円墳	後期	1		2			2		2	3	B
福岡県	朝倉市	妙見 8 号	円墳	後期	1	1				1		3	3	B
福岡県	小郡市	花立山 2 号横穴	横穴	後期	1							1	1	C 1
福岡県	小郡市	花立山 6 号横穴	横穴	後期		1		1		1		2	2	B
福岡県	小郡市	花立山 12 号横穴	横穴	後期			1					1	1	C 3
福岡県	甘木市	池の上 6 号	円墳	中期	1	1						2	2	B
福岡県	久留米市	石垣古墳群 A	不明	—	1							(1)	(1)	(C 1)
福岡県	久留米市	石垣古墳群 B	不明	—	1							(1)	(1)	(C 1)
福岡県	久留米市	七曲山 1 号	円墳	中期			1					1	1	C 3
佐賀県	小城市	丹坂峠	円墳	後期	1							1	1	C 1
佐賀県	鳥栖市	東十郎特別地区イ号	円墳	後期	1		1			1		2	2	B
佐賀県	鳥栖市	東十郎特別地区ロ号	円墳	後期	1							1	1	C 1
佐賀県	鳥栖市	梅坂 5 号	不明	後期	1							1	1	C 1
佐賀県	吉野ヶ里町	塚山	前方後円墳	中期		1	1					2	2	B
熊本県	熊本市	丸山 3 号	円墳 (周溝)	中期	1							1	1	C 1

凡例は第20表・第21表に準拠



第 211 図 朝鮮半島南部から出土した鉄鉗の諸例

第19表 朝鮮半島南部における鍛冶具出土古墳

道	所在地	古墳名	埋葬施設等	時期	鍛冶具						鉄製鍛冶具の内容		
					鉄鋸	鉄鋤	鋳	鋤	鉄砧	砥石	種	点	類型
京畿道	平澤	玄華里Ⅳ-1区土坑墓	土坑	中期	1						1	1	C
忠清北道	清原	米川里古墳群	不明	—	1						—	—	—
忠清南道	天安	龍院里58号	土坑	中期	1						1	1	C
全羅北道	完州	上雲里カ5号(1)	木棺	前～中期	1	1					2	2	B
全羅北道	完州	上雲里ナ1号(1)	木棺(粘土)	前～中期	1	1		1			3	3	B
全羅北道	完州	上雲里ナ1号(6-2)	木棺(粘土)	前～中期	2						1	2	C
全羅北道	完州	上雲里ナ2号(1)	木棺	前～中期	1	1					2	2	B
全羅北道	完州	上雲里ナ4号(4)	木棺	中期	1	1		1			3	3	B
全羅北道	完州	上雲里ナ4号(7)	木棺	中期	1	1					2	2	B
全羅北道	完州	上雲里ナ5号(2)	木棺	中期	1	1	1	1			4	4	A
全羅北道	完州	上雲里ナ6号(2)	木棺	前～中期	1	1		1			3	3	B
全羅北道	完州	上雲里ナ7号(1)	木棺	前～中期	1						1	1	C
全羅北道	完州	上雲里ナ7号(9)	木棺	前～中期	1	2					2	3	B
全羅北道	完州	上雲里ナ8号(1)	木棺	中期	1	1	1	1			4	4	A
全羅北道	完州	上雲里ナ8号(2)	木棺	中期	1	2		1			3	4	B
全羅北道	完州	上雲里ナ8号(3)	木棺	中期	1	1		1			3	3	B
全羅北道	完州	上雲里ウ1号(1)	木棺	前～中期	1	1					2	2	B
全羅北道	完州	上雲里ウ1号(20)	木棺(粘土)	前～中期	1	1					2	2	B
全羅北道	完州	上雲里ウ1号(28)	木棺	中期	1	1					2	2	B
全羅北道	完州	上雲里ウ1号(29)	木棺	中期	1	2	2	1			4	6	A
全羅北道	完州	上雲里ウ2号(1)	木棺	中期	1	1					2	2	B
全羅北道	完州	上雲里ウ2号(3)	木棺	中期	1	1					2	2	B
全羅北道	完州	上雲里ウ8号	木棺	中期	1						1	1	C
全羅南道	務安	社倉里甕棺	甕棺	中期	1	1	(1+)		1	2	4+	6+	A
慶尚北道	慶州	皇南大塚北墳	横石木槨	中期	1						1	1	C
慶尚北道	慶州	金鈴塚	横石木槨	後期	1						1	1	C
慶尚北道	慶州	月山里A18号	竖穴式石槨	中～後期	2	3		1			3	6	B
慶尚北道	慶州	徳泉里4号(副)	横石木槨	中期	1	1	3		1		4	6	A
慶尚北道	慶山	林堂造永CⅠ-135号	横穴式石室	後期	1		1		1		3	3	B
慶尚北道	慶山	林堂DⅡ-47号	土坑	後期	1	1			1		3	3	B
慶尚北道	慶山	林堂DⅡ-182号	土坑	後期	1	1	(1+)		1		3+	3+	B+
慶尚北道	慶山	林堂造永EⅠ号(副)	木槨	中期	1		1			1	3	3	B
慶尚北道	慶山	林堂造永EⅡ-1号	横穴式石室	中期	1					1	2	2	B
慶尚北道	慶山	新上里カⅡ-45号	横石木槨	中期	1	1			1		3	3	B
慶尚北道	慶山	新上里カⅢ-10号	木槨	中期	1		2				2	3	B
慶尚北道	大邱	時至洞ⅠB-61号	竖穴式石槨	後期		2					1	2	C
慶尚北道	大邱	時至洞ⅠC-15号	竖穴式石槨	後期	1	1	1				3	3	B
慶尚北道	大邱	時至洞ⅠD-145号	竖穴式石槨	後期	1	2					2	3	B
慶尚北道	大邱	旭水洞ナ-9号	竖穴式石槨	後期	1	1		1	1		4	4	A
慶尚北道	大邱	時至洞39号	—	後期	1						1	1	C
慶尚北道	大邱	汶陽里35号	竖穴式石槨	中期	1	1					2	2	B
慶尚北道	大邱	達城古墳群	不明	不明	1						—	—	—
慶尚北道	浦項	鶴川里196-1号	竖穴式石槨	中～後期	1	1			1		3	3	B
慶尚北道	尚州	軒新洞58号	竖穴式石槨	中～後期	1		2				2	3	B
慶尚北道	尚州	軒新洞95号	横口式石室	後期	1	1	1	1			4	4	A
慶尚北道	龟尾	黄桑洞94号	竖穴式石槨	中～後期	1	1					2	2	B
慶尚南道	蔚山	大岱里36号	竖穴式石槨	中～後期	1	1	1				3	3	B
慶尚南道	蔚山	早日里(昌)54号	不明	—	1	1					2	2	B
慶尚南道	蔚山	明山里38号	横穴式石室	後期		1			1		2	2	B
慶尚南道	蔚山	茶雲洞ハ-12号	竖穴式石槨	後期	1	1			1		3	3	B
慶尚南道	蔚山	薬洞北洞21号	竖穴式石槨	後期	1		1	1	1		4	4	A
慶尚南道	蔚山	薬洞北洞178号	竖穴式石槨	中期		1	1	(1)			3	3	B
慶尚南道	蔚山	薬洞北洞184号	竖穴式石槨	中期	1		1	1			3	3	B
慶尚南道	蔚山	薬洞北洞187号	竖穴式石槨	中期	2	1					2	3	B
慶尚南道	蔚山	薬洞北洞200号	竖穴式石槨	中期	1	1	1				3	3	B
慶尚南道	蔚山	薬洞北洞218号	竖穴式石槨	中期	1	1			1		3	3	B
慶尚南道	蔚山	華峰洞14号	竖穴式石槨	—	1						1	1	C
慶尚南道	蔚山	雲化里1号	横穴式石室	後期	1						1	1	C
慶尚南道	昌寧	桂城A-14号	横口式石室	後期	1	1			1		3	3	B
慶尚南道	昌寧	桂城B39-1号	横口式石室	後期		1			1		2	2	B
慶尚南道	昌寧	桂城B-3号	横口式石室	後期	1						1	1	C
慶尚南道	昌寧	桂城I-26号	横口式石室	後期	1						1	1	C
慶尚南道	昌寧	桂城89号	横口式石室	後期	1	1			1		3	3	B
慶尚南道	陝川	玉田M3号	木槨	中期	1	1				5	3	7	B
慶尚南道	陝川	李浦里E5-1号	横口式石室	後期	1	1					2	2	B
慶尚南道	陝川	倉里B-26号	横口式石室	後期	1						1	1	C
慶尚南道	宜寧	礼屯里46号	竖穴式石槨	中期	1	2					2	3	B
慶尚北道	梁山	北亭里14号	横口式石室	後期	1	1	1		1		4	4	A
慶尚南道	密陽	月山里5号	竖穴式石槨	後期	1	1			1		3	3	B
慶尚南道	釜山	福泉洞35号	竖穴式石槨	中期	1	1					2	2	B
慶尚南道	釜山	福泉洞73号	竖穴式石槨	中期		1					1	1	C
慶尚南道	金海	徳亭里古墳群	竖穴式石槨	中～後期	1						1	1	C
慶尚南道	昌原	縣洞64号	竖穴式石槨	中期	1		1				2	2	B
慶尚南道	馬山	盤溪洞Ⅰ-24号	竖穴式石槨	後期	2	2			1		3	5	B
慶尚南道	馬山	合城洞9号	竖穴式石槨	中～後期	1	1					2	2	B
慶尚南道	咸安	会山里1号	竖穴式石槨	中期	1	1					2	2	B
慶尚南道	山清	玉山古墳群	不明	—	○	○					—	—	—

凡例は第20表・第21表に準拠

播する。東日本への移入は古墳時代中期後葉以降であり、西日本地域と比べて遅れる傾向がある。また、東日本では副葬される鍛冶具が小型品の鉄鉗に限定され、鉄器製作工程の複雑化という視点においても西日本地域との違いがある。6世紀以降も、東日本地域では小型の鉄鉗のみを副葬することが存続することを考慮すると、鉄器製作にかかわる東西差は少なくとも6世紀までは顕著であったと解釈できよう。このように、副葬鍛冶具の充実度の違いは、日本列島内における鉄器生産能力の違いを示すものと捉えられる。

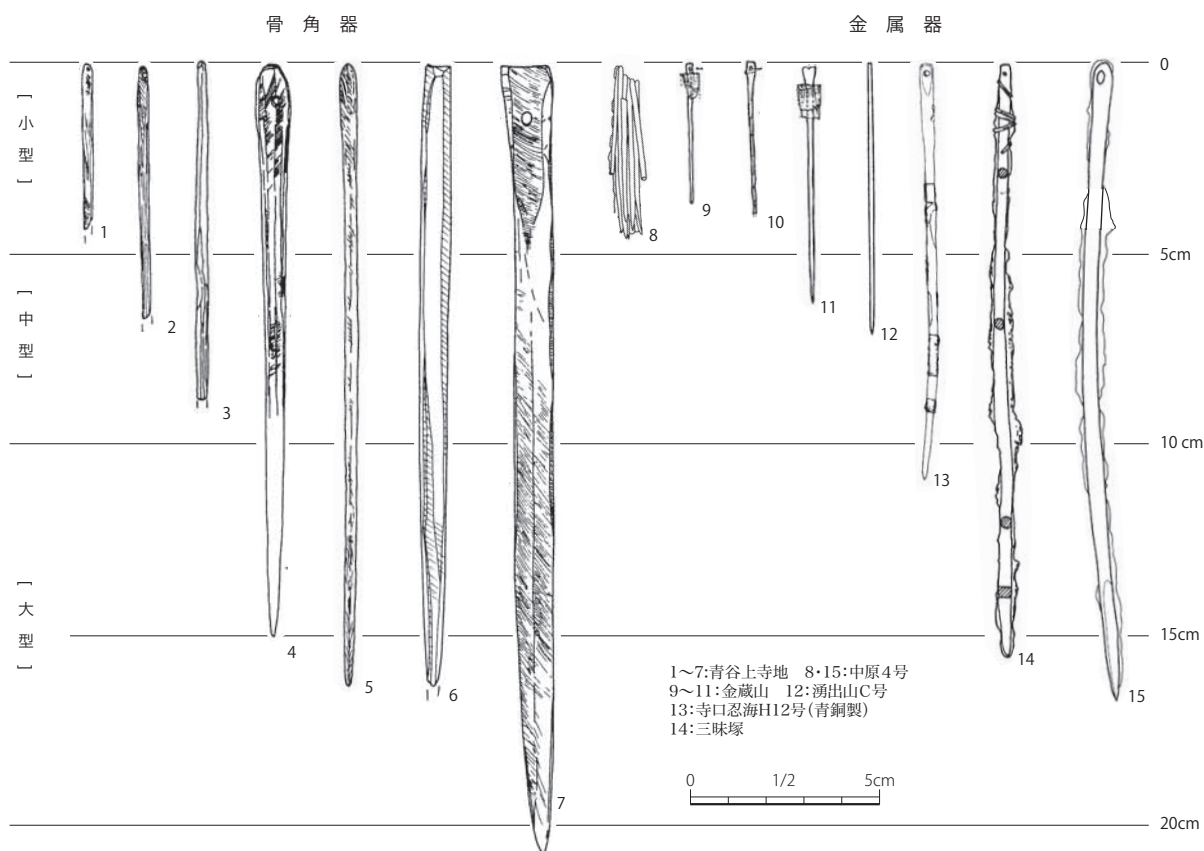
鍛冶具の副葬には、鉄器生産の統括者としての首長の性格や直接的な鉄器生産者としての職能が示されると解釈される。小規模な古墳である中原4号墳の事例は、両者の性格を併せ持つものといえる。当墳では鍛冶具以外の生産用具も豊富に出土していることを重視すると、中原4号墳における鉄鉗の副葬行為は、地域における手工業生産を総括する中で鉄器生産にかかわる技術集団も統率する役割を担った被葬者の職能を表象するものと捉えておきたい。

5 金属製針副葬の意義

古墳から出土する金属製針については、鉄製のものと青銅製のものが知られている。出土事例の報告に合わせ、集成や事例紹介が繰り返し行われ（安部 1969、平ノ内 1984、楠本・朴編 1986、大谷 2010）、およそその変遷が示されるに至っている（大谷 2012、註 10）。

鉄製針については、布や革などを縫う機能を果たす縫い針のほかに、穿孔などの用途をもった工具としての針状鉄製品がある。また、髪留めとしての針状品についても、その存在を想定すべきであろう。糸を通す小孔が認められない場合、形態的特徴からこれらを弁別することは難しい。

また、後述するように、古墳から出土する針には筒状の容器に入れられたり、束の状態で収められたりするのが知られ、収納状況等から縫い針と認識しうる事例が多く認められる。本稿で扱う金属製針には、工具や髪留め等、別の用途の製品が含まれる余地があるが、可能な限り縫い針と認識しうる事例を比較資料として取り上げておきたい（第 20 表・第 21 表）。



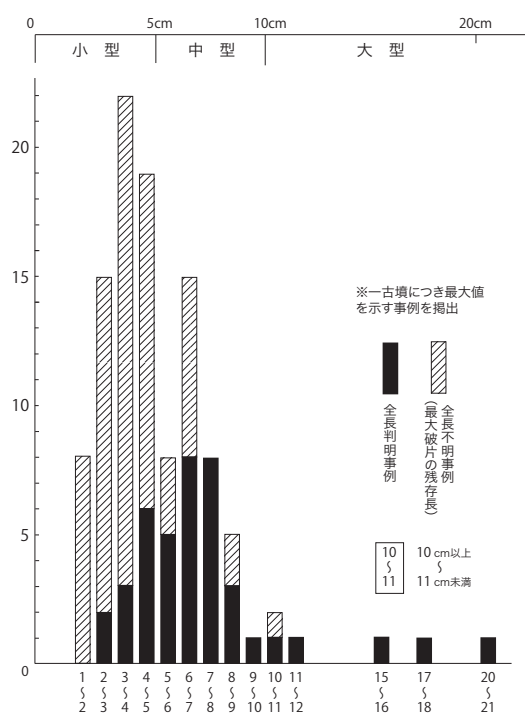
第 212 図 針の諸例

形態的特徴 針は直径1mm程度の繊細な遺物であることから欠損する事例が多く、網羅的に形態や大きさを検討することが難しい。第213図は古墳出土の金属針の大きさを整理したものであるが、総数が不明確なものが多いことから、一古墳につき、最大値を示す1点を取りあげ図示した。全体形状がうかがえる事例の長さを比較すると、おおむね4～6cmを頂点に2.5cm～10cm程度の大きさのものが圧倒的多数を占めることが分かる。定量的に数値を示すことは難しいが、ここでは大谷宏治の認識に導かれながら、全長5cm未満のものを小型品、5cm以上10cm未満のものを中型品、10cm以上20cm未満のものを大型品、20cm以上のものを超大型品としたい（大谷2010）。中原4号墳では、全長3.5～4.0cmほどの小型品12本が束になっており、全長17.0cmの大型品が錯着している。また、本墳には全長14.1cmの大型品がもう一点ある。12本以上の小型品と2本の大型品が組み合う事例は、他に例がない。

古墳出土の金属針の頭部は、扁平にされることが一般的で、孔があけられているものが多数であったと想定できる。頭部は破損することも多く、微細な孔を報告時点で見落とすことも多いとみられる。報告時には孔の存在が不明確でも、再検討の結果、孔が確認できる事例報告があり（間壁2000）、金属針における孔の確認が困難なことをよく示している。近年の報告例では、X線画像をふまえた詳細な観察を経ており、頭部に孔を認める事例が増加している。ただし、滋賀県湧出山C号墳例など念入りの検討を加えても孔が確認できない事例もある。金属製針についても、青谷上寺地遺跡から出土した骨角製針に知られるような無孔式、有頭式といった頭部形態も想定すべきであろう。

針の断面形態についても円形、方形、杏仁形などの多様性が認められる。微小な鉄器の場合、正確な断面形状をうかがうことが困難であること、円形に見えても実際は角が取れた多角形状を呈するものが含まれる可能性が高いことなどから、断面形状にかかわる検討は深めることが難しい。ここでは、扁平で杏仁形を呈する奈良県大谷今池2号墳例のような、通常の裁縫とは異なる用途に用いられた可能性がある針も知られていることを指摘するにとどめておきたい。

小型品や中型品は、古墳時代を通じて存続し、金属針として一般的な製品であることが知られる。いっぽう、



第213図 針の全長比較

大型品や超大型品については数が限られることに加え、奈良時代の遺品である正倉院宝物中に銀製、銅製、鉄製の全長35cmを超える超大型品が知られることから、儀礼用具である可能性が示されている（大谷2012、註11）。しかし、青谷上寺地遺跡から出土した弥生時代の骨角製針をみると、全長10cmをこえる大型品が一定量含まれることが知られており、大型であることのみをもって非実用品と判断するのは早計であろう。中原4号墳から出土したその他の生産用具はほぼ全てが実用に耐えうる大きさであることから考えても、本墳から出土した大型針についても、たとえ儀式で用いられたことがあったとしても一義的には実用品と捉える方が妥当と判断しうる。針は、服飾や刺繍といった繊細な裁縫用具として用いられる以外にも、敷物や皮革製品といった比較的硬く大きな物品の製作に使われることも想定できる。大型品は機能分化した針の一形態として、弥生時代から継続して存在するものと捉えられよう。

分布と推移 鉄製針は古墳時代の前期前半から終末期まで出土例がある。弥生時代には福岡県南八幡遺跡例など工具としての針状鉄製品が知られるものの、小孔をもつような縫い針は認められない。縫う機能をもった狭義の針は古墳時代に移行してから鉄器化が進んだものとみてよいだろう。銅製の針は後期、終末期のものが知られ

第20表 針出土古墳(1)

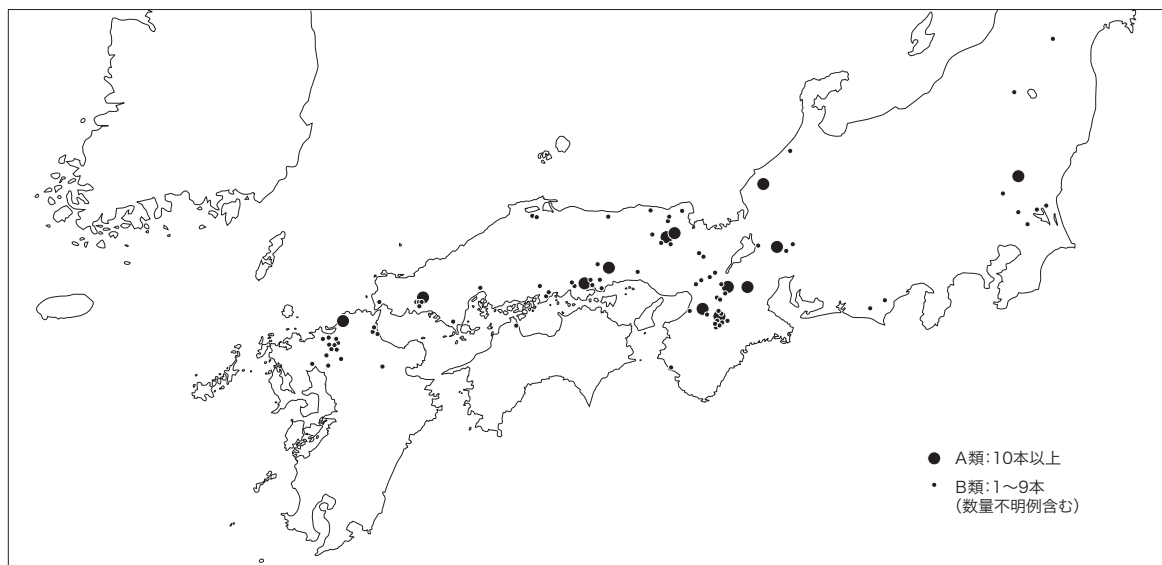
都府県	所在地	古墳名	墳形	埋葬施設	時期	針の詳細					共存関係		
						数	出土位置	長さ	孔	特記事項	甲	鏃	人骨
山形県	山形市	お花山1号(10)	円墳	木直	中期	1	刀子共存	(8.3)	不明			×	
福島県	会津坂下町	森北1号	後方	木直	前期	1	(農工具共存)	4.3	不明			×	
福島県	白河市	郭内6号横穴	—	横穴	終末期	○	—	(3.8)	不明			○	
茨城県	稲敷市	原1号	後円	木直	前期	○	農工具共存	(3.0)	不明	糸状繊維有		×	
茨城県	行方市	三味塚	後円	箱石	中期	1	石棺内	15.8	有孔	大型針	○	○	♂
茨城県	坂東市	上出島2号	後円	粘礫	前期	1	—	5.1	不明	筒入力		○	
栃木県	宇都宮市	中島笹塚1号	円墳	—	中期	17+	—	(3.8)	不明	17本束		—	
群馬県	前橋市	前橋天神山	後円	粘礫	前期	7	—	—	不明			○	
千葉県	香取市	城山1号	後円	横石	後期	30	—	(5.0)	有孔		○	○	
千葉県	市原市	山王山	後円	粘礫	後期	3	刀子共存	(1.9～2.3)	不明			○	
千葉県	我孫子市	水神山	後円	粘礫	中期	2+	刀子共存	(5.0)	不明	筒入		×	
東京都	世田谷区	殿山1号	円墳	横石	後期	1	—	(2.2)	不明			○	
神奈川県	伊勢原市	下谷戸7号	円墳	横石	後期	1	単独	(1.8)	不明			○	
神奈川県	さんせ塚	さんせ塚	円墳	横石	後期	(1)	—	—	不明			○	
石川県	能美市	西山9号	不明	横石	後期	13	—	(3.3～3.5)	不明	13本束		○	
石川県	能美市	秋常山2号	方墳	粘礫	中期	3	農工具共存	(4.1)	不明	筒入		×	
石川県	七尾市	中島ヤマンタン25号	円墳	横石	後期	(2)	—	(3.5)	不明			○	
福井県	福井市	花野谷2号	帆立	粘礫	中期	16+	装身具共存	5.2～6.7	有孔	筒入		○	
長野県	伊那市	如来堂	円墳	—	後期	(1)	—	—	不明		(○)	○	
岐阜県	本巣市	船木山O274号	(円墳)	横石	後期	6+	—	(4.5)	不明	5本束		×	
岐阜県	大垣市	昼飯大塚	後円	竪石	中期	37片	—	(2.5)	不明	束		—	
岐阜県	岐阜市	龍門寺1号	円墳	粘礫	中期	4+	単独	4.5	不明		○	○	
静岡県	三島市	田頭山1号	円墳	横石	後期	1	(武器共存)	10.6	有孔			○	
静岡県	富士市	須津J6号	円墳	横石	後期	4+	単独	2.4～2.9	有孔			○	
静岡県	富士市	中原4号	円墳	横石	後期	14+	農工具共存	4.6、17.1	有孔	12本束、大型2		○	
静岡県	藤枝市	岩田山21号	円墳	木直	中期	1	—	—	不明			×	
静岡県	掛川市	高代山4号	円墳	木直	後期	3±	—	(3.0)	不明			○	
静岡県	掛川市	春院林	円墳	粘礫	前期	5片	(農工具共存)	(1.1～2.1)	不明	筒入		×	
愛知県	犬山市	東之宮	後方	竪石	前期	9+	農工具共存	6.0	不明	筒入		○	
三重県	伊賀市	石山(東柳)	後円	粘礫	中期	20+	武器共存	—	不明	筒入	○	○	
		石山(西柳)		粘礫		20+	農工具共存	—	不明	筒入		×	
		滋賀県		木直		8+	農工具共存	7.2	無	筒入		○	
京都府	長浜市	湖出山C号	方墳	木直	中期	8+	農工具共存	7.2	無	筒入		○	
京都府	城陽市	芝ヶ原10号(2)	円墳	粘礫	中期	13片	単独	6.0	不明	筒入		×	
京都府	城陽市	芝ヶ原11号(1)	後円	粘礫	中期	8	単独	—	不明	筒入	○	○	
京都府	綾部市	奥大石2号(SX205)	方墳	木直	中期	1	装身具共存	2.6	不明			×	
京都府	城陽市	西山1号	後方	粘礫	前期	13	単独	—	—			×	
京都府	向日市	井ノ内稲荷塚	後円	横石	後期	2	—	(1.6～2.1)	不明			○	
京都府	京丹後市	里ヶ谷3号	—	横穴	後期	1	—	7.0	不明			×	
京都府	南丹市	園部垣内	後円	木直	前期	4+	農工具共存	7.0～8.0	不明	繊維巻付	○	○	
京都府	南丹市	平山	円墳	木直	前期	1	農工具共存	(2.9)	不明			×	
京都府	京丹後市	大田南6号	円墳	木直	前期	8片	単独	(4.7)	不明			×	
京都府	長岡京市	宇津久志1号	方墳	木直	(中期)	○	—	—	不明			×	
京都府	与謝野町	入谷西D1号	(方墳)	横石	後期	4+	土師器壺内	5.3	不明	筒入		×	
京都府	木津川市	上人ヶ平16号	方墳	木直	中期	2	単独	—	不明			×	
大阪府	高槻市	弁天山D2号(b)	後方	木直	中期	1	装身具共存	(5.0)	不明			×	
大阪府	高槻市	弁天山D2号(c)	後方	木直	中期	1	刀子共存	(3.0)	不明			○	
大阪府	高槻市	紅葺山C3号	円墳	木直	中期	2	—	—	不明			○	
大阪府	岸和田市	風吹山(2)	帆立	粘礫	中期	8	農工具共存	(4.0)	不明			×	
大阪府	八尾市	心合寺山(西)	後円	粘礫	中期	10片	単独	(4.5)	不明		○	○	
兵庫県	豊岡市	カチャ	円墳	木直	中期	3	単独	7.3～7.7	有孔			×	♀
兵庫県	豊岡市	深谷1号(2)	方墳	木直	中期	1	単独	4.2	不明			×	
兵庫県	朝来市	茶すり(1)	円墳	粘礫	中期	1	装身具・刀子共存	(2.4)	不明	筒入	○	○	
		茶すり(2)		粘礫		10	農工具・櫛共存	7.2	不明	筒入		○	
兵庫県	朝来市	梅田1号	円墳	木直	中期	21片	装身具共存	5.5～6.9	有孔	筒入		○	
兵庫県	朝来市	梅田3号(2)	円墳	木直	中期	1+	単独	(4.7)	不明			○	
兵庫県	養父市	田和	—	箱石	中期	○	—	—	不明			×	♀
兵庫県	朝来市	柿坪中山4号(1)	円墳	竪石	前期	1	農工具・武器共存	(3.1)	不明			○	♂
兵庫県	たつの市	鳥坂3号	円墳	粘礫	中期	(○)	(単独)	(6.1)	不明	針か不明確		×	
兵庫県	香美町	大寺山古墳群	—	—	中期	○	—	—	不明			×	
奈良県	奈良市	ベンショ塚(2)	後円	粘礫	中期	○	—	—	不明		○	○	
奈良県	桜井市	桜井茶白山	後円	竪石	前期	○	—	—	不明			○	
奈良県	桜井市	双築1号	円墳	粘礫	前期	4±	農工具共存	(2.7～3.7)	不明	筒入		×	
奈良県	宇陀市	見田大沢1号(中)	後円	木直	後期	1	(農工具共存)	(4.9)	不明			○	
奈良県	葛城市	大和二塚(造出)	後円	横石	後期	10	—	20.2	不明			○	
奈良県	葛城市	寺口千塚16号	円墳	横石	後期	1	—	(10.7)	有孔			○	
奈良県	葛城市	寺口忍海E12号	円墳	横石	後期	1	—	11.0	有孔	青銅製		×	
奈良県	葛城市	寺口忍海H34号	円墳	横石	後期	1	—	(3.0)	不明	繊維巻付		○	
奈良県	葛城市	寺口忍海H39号	—	横石	後期	5	—	5.3	不明	筒入		○	
奈良県	斑鳩町	藤ノ木	円墳	横石	後期	17+	(農工具共存)	3.2～3.5	不明	17本+束	○	○	♂
奈良県	大和高田市	大谷今池2号	円墳	木直	後期	1	(農工具共存)	(6.4)	有孔			○	
奈良県	葛城市	火野谷山2号	円墳	木直	中期	1+	—	(2.1)	不明			×	
奈良県	宇陀市	北原(北棺)	円墳	木直	中期	6	農工具共存	8.0	有孔	筒入		○	
奈良県	宇陀市	北原西1号	後方	木直	中期	10+	農工具共存	(～1.8)	不明	鉋錯着		○	
奈良県	宇陀市	後出6号	円墳	木直	中期	5	単独	(2.7)	不明	筒入		○	
奈良県	宇陀市	前山1号(東)	円墳	木直	中期	1	単独	(5.2)	不明			×	
奈良県	宇陀市	池殿奥5号(南)	後円	木直	中期	2	—	(2.9)	不明			○	

第21表 針出土古墳(2)

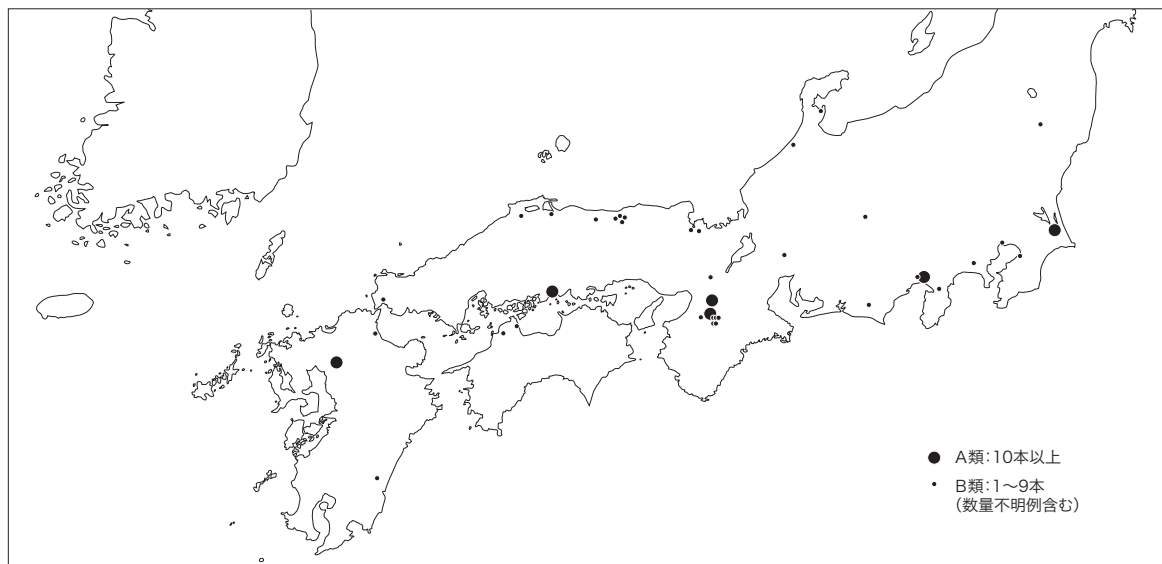
都府県	所在地	古墳名	墳形	埋葬施設	時期	針の詳細					共伴関係		
						数	出土位置	長さ	孔	特記事項	甲	鏃	人骨
奈良県	宇陀市	ヲトンダ4号(1)	円墳	木直	中期	1	単独	—	不明			○	
奈良県	高取町	市尾今田1号	円墳	粘柳	中期	1	—	—	不明		○	○	
奈良県	高取町	タニグチ1号	円墳	粘柳	前期	2	農工具共伴	(1.8～3.3)	不明		○	○	
奈良県	高取町	タニグチ3号	円墳	木直	中期	8片	農工具共伴	(～2.3)	不明			○	
和歌山県	御坊市	岩内3号	円墳	木直	中期	5	装身具共伴	7.6	有孔	筒入		×	♀
鳥取県	湯梨浜町	宮内2号(3)	後円	箱石	後期	1	—	3.6	不明			○	
鳥取県	北栄町	狼谷	円墳	箱石	中期	1	—	—	不明			×	
鳥取県	鳥取市	桂見2号(1)	方墳	木直	前期	○	—	—	不明			×	
鳥取県	鳥取市	糸谷3号(5)	方形墳	箱石	前期	1	単独	(3.4)	不明	単独か		×	
鳥取県	鳥取市	六部山28号(1)	円墳	木直	後期	1	(装身具共伴)	6.6	不明			×	
鳥取県	鳥取市	六部山80号	円墳	木直	後期	1	—	(1.7)	不明			○	
鳥取県	鳥取市	浜坂横穴墓群	—	横穴	終末期	○	—	—	不明			○	
鳥取県	米子市	日下12号	円墳	箱石	後期	1	農工具共伴	(1.6)	不明			○	
鳥根県	出雲市	上島	円墳	横石	後期	4	—	(3.6)	不明			○	
鳥根県	安来市	小丸子山	—	横穴	後期	○	—	—	不明			×	
鳥根県	雲南市	松本1号(1)	後方	粘柳	前期	7+	農工具共伴	8.6	不明	繊維巻付		×	
鳥根県	雲南市	神原神社	方墳	堅石	前期	4片	農工具共伴	6.3	不明			○	
岡山県	赤穂市	四辻1号	円墳	木直	中期	1	刀子共伴	(6.0)	不明			×	
岡山県	岡山市	七つ坑1号(1)	後方	堅石	前期	2	—	(4.3)	不明			○	
岡山県	岡山市	金蔵山(合子)	後円	堅石	中期	30±	農工具共伴	2.3～3.5	有孔	筒入		○	
		金蔵山(南)		堅石		○	農工具共伴	(3.2)	不明			○	
岡山県	岡山市	旗振台(北)	方墳	粘柳	中期	1	(単独)	—	不明			○	○
岡山県	美咲町	月の輪(南)	円墳	粘柳	中期	22+	単独	4.2～7.5	不明	筒入		×	(♀)
岡山県	瀬戸内市	我城山6号	円墳	木直	中期	1	—	—	不明			○	
岡山県	倉敷市	勝負砂	後円	堅石	中期	1	工具共伴	11.6	有孔	筒入		○	○
岡山県	総社市	佐野山	方墳	箱石	中期	2	—	7.3	不明	筒入		○	○
岡山県	真庭市	堂山5号	円墳	木直	中期	2	—	—	不明			○	
岡山県	総社市	西山26号	方墳	粘柳	中期	3+	装身具共伴	(1.7)	不明			×	
広島県	福山市	山の神	(円墳)	横石	後期	10+	—	不明	不明			×	
広島県	福山市	才谷3号(A)	円墳	箱石	中期	1	単独	(3.0)	不明			×	
広島県	福山市	才谷4号(B)	円墳	土坑	中期	1	(農工具共伴)	(1.8)	不明			×	
広島県	府中市	山ノ神1号(2)	円墳	箱石	中期	1	—	(2.3)	不明			×	♂/♀
広島県	広島市	地藏堂山1号	円墳	木直	中期	1	有孔円盤共伴	(4.2)	不明			○	
山口県	山口市	赤妻(舟)	円墳	石棺	中期	(20)	(装身具共伴)	—	不明			×	♀
山口県	山口市	朝田Ⅰ-2号周溝	円墳	箱石	中期	1	石製模造品共伴	(5.2)	不明			×	♀
山口県	山口市	朝田Ⅲ-7号	円墳	箱石	中期	1	単独	(4.2)	不明			×	
山口県	山口市	朝田Ⅱ-12号	円墳	箱石	中期	2	単独	(3.2)	不明			○	(小児)
山口県	田布施町	国森	方墳	木直	前期	1	平根畿・農工具共伴	(0.8)	不明			○	
山口県	長門市	糠塚横穴墓群	—	横穴	終末期	1	—	5.1	不明	青銅製		×	
山口県	下関市	形山石棺	—	箱石	(前期)	1	—	—	不明			×	
山口県	下関市	汐入町	—	石蓋	(中期)	10±	—	—	不明			×	
愛媛県	今治市	雄之尾1号	後方	木直	前期	3	武器共伴	—	不明			○	
愛媛県	今治市	若草4号	—	横石	後期	1	—	(1.5)	不明			×	
愛媛県	松山市	葉佐池(2)	楕円墳	横石	後期	2	—	(2.7)	不明			○	
福岡県	古賀市	馬渡東ヶ浦 SF4	—	土坑	中期	7+	装身具共伴	(1.8～6.9)	不明			×	
福岡県	福岡市	老司(3)	後円	横石	中期	2	農工具共伴	(6.6)	不明			○	○
福岡県	福岡市	鋤崎(1)	後円	横石	中期	6+	刀子共伴	(4.8)	不明	筒入		×	
		鋤崎(2)		横石		7	単独	(3.7)	不明	筒入		×	
福岡県	宇美町	神領2号	円墳	粘柳	中期	3	装身具共伴	6.5	有孔			×	
福岡県	筑紫野市	欠塚	後円	横石	中期	1	—	(2.2)	不明			○	○
福岡県	みやこ町	古川平原5号	円墳	箱石	中期	1	単独	(3.2)	不明			○	♂
福岡県	福津市	奴山正園	円墳	箱石	中期	36±	石製模造品共伴	6.0	不明	筒入3×12カ		○	○
福岡県	大宰府市	菖蒲浦1号	—	粘柳	中期	1	装身具共伴	6.2	有孔	筒入		×	
福岡県	甘木市	柿原Ⅰ-2号	円墳	横石	後期	11	装身具共伴	3.7～4.0	不明	11本束		○	
福岡県	粕屋町	西尾山1号	円墳	横石	中期	1	装身具共伴	(6.4)	不明			×	
福岡県	志免町	営業1号	円墳	木直	中期	5+	装身具共伴	(4.3)	不明			○	
福岡県	志免町	七ヶ池	円墳	堅石	中期	2	装身具共伴	(5.5～6.2)	不明	筒入		×	♀
福岡県	みやこ町	惣社	円墳	堅石	中期	2	—	(8.8)	有孔	採集品		○	
福岡県	荏田町	奥ヤ子	不明	横石	後期	1	—	(4.5)	不明			○	
福岡県	荏田町	古大内石棺	—	箱石	中期	2+	—	—	不明			不明	
福岡県	那珂川町	野口2号(1)	—	土坑	中期	2	—	5.1	不明			×	
福岡県	うきは市	天神山	—	箱石	中期	4±	—	7.2	不明	繊維巻付		不明	
福岡県	甘木市	古寺D-10号	—	石蓋	中期	1	刀子共伴	(3.2)	不明			×	
佐賀県	佐賀市	熊本山	円墳	石直	前期	1	農工具共伴	4.5	不明			○	×
熊本県	玉名市	伝左山	円墳	横石	中期	3+	—	—	不明			○	○
大分県	玖珠町	おこもり1号(4)	方墳	箱石	(中期)	1	—	—	不明			○	
宮崎県	国富町	市の瀬10号	—	地下	後期	1	農工具共伴	9.5	有孔			○	

凡例：古墳名欄の（ ）：埋葬施設の名称 その他の欄の（ ）：不確実な情報であることを示す +：実数は増える可能性がある事例 ±：概数を示す
 墳形の略称 後円：前方後円墳、後方：前方後方墳、帆立：帆立貝形墳
 埋葬施設の略称 木直：木棺直葬、箱石：箱式石棺、横石：横穴式石室、粘柳：粘土柳、堅石：堅穴式石室、地下：地下式横穴

鉄製針出土古墳の分布(前期～中期)



鉄製針出土古墳の分布(後期～終末期)



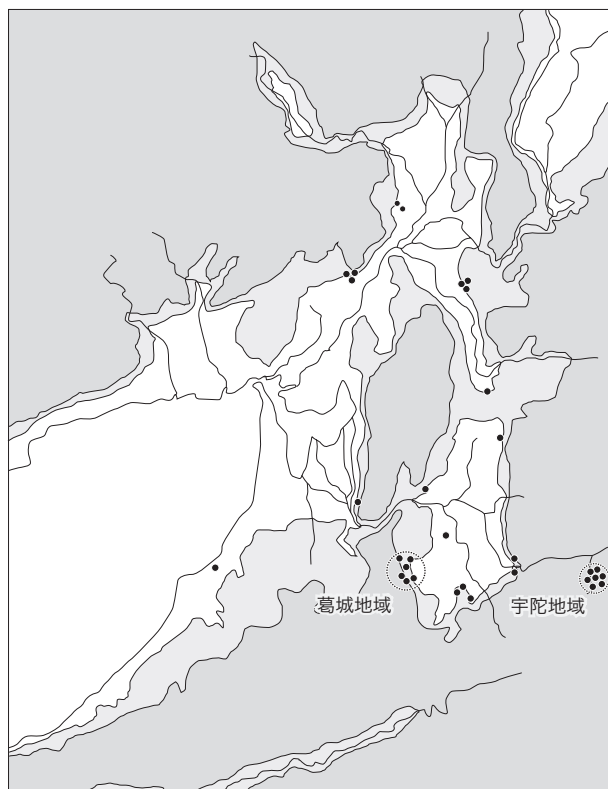
第214図 針の分布

ている。正倉院にみられる銅針と関連づけることが許されれば、儀礼に用いられた可能性も考慮する。小型品、中型品、大型品といった多様性は、弥生時代の骨角器に認められるので、道具としての機能分化は弥生時代に進行していたことが分かる。

古墳時代を通じて針が出土した古墳の分布の中心は近畿地方と捉えられるが、北部九州、瀬戸内、山陰などからの出土例も多い。分布の中心が近畿地方中央部にあること、大型古墳の副葬品に含まれることから、葬送儀礼が定型化されていく中で、倭王権の中枢が鉄製針を儀礼用具として採用し、地方に拡散させたと捉えてよいだろう。針が出土した古墳に注目すると、前期では前方後円

(方)墳(註12)が、中期では甲冑を出土するような有力古墳が多いことに気付く。針の副葬が全国の有力首長の間で共有されていたことを伝えている。

いっぽう、中小古墳から針が出土することも多い。とくに奈良県の宇陀地域や忍海郡域を含む葛城地域は、中期から後期にかけて針を副葬する古墳が目立ち、針の副葬行為が小地域の中で特化していたことが分かる(第215図)。この地域の針出土地には寺口忍海古墳群など渡来系技術者集団の墳墓とみられる古墳群が含まれ、特産物の一つに布・皮革製品が含まれていた可能性が考えられる。この他、針の出土古墳が比較的集中する地域として、北部九州をはじめ、山口県域、鳥取県域などがある。

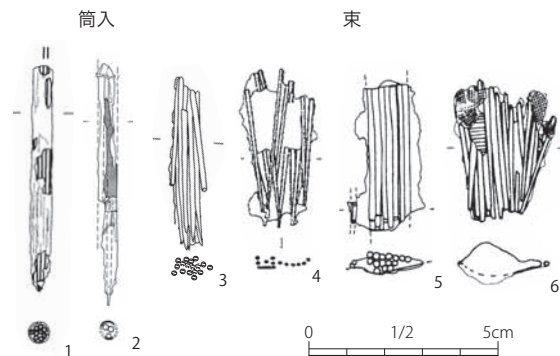


第215図 近畿地方中央部における針出土古墳の分布

げられる。これらの地域の評価は個別に検討を深める必要があるが、針の副葬行為が偏って認められることは、地域性の発露と評価できるだろう。

副葬形態 針の副葬形態には、竹などの筒状容器に入れられるものに加え、筒以外のものを用いて束にされている事例や、1本ずつ分けて副葬する場合などがある。筒を容器として用いた事例では、2～3本といった少数の針がまとめられていることが多いが、愛知県東之宮古墳例のように一つの筒に9本程度の針を入れた事例も知られる。筒の直径は5mm程度であり、その材質は竹である可能性が高い。筒入りの副葬形態は、古墳時代前期から後期まで認められるが、前期や中期の事例が多く、古墳時代の中では比較的古い時期に好まれたものといえるだろう。

針を束にして副葬する場合は、10数本がまとめられている事例が多い。繊維などが巻きついた事例もあるので、針の束を糸などで巻きつけたり、容器や袋に入れたりしたものみられる。針を束ねて副葬する行為は古墳時代前期から看取できるが、古墳時代後期の事例が目立つ。束の状態で副葬することは、筒に入れることと入れ替わり、比較的新しい時期に多いといえるだろう。



1:東之宮 2:奴山正園 3:中原4号 4:柿原I2号 5:中島笹塚1号 6:藤ノ木

第216図 針の副葬形態

針は単体で出土する場合もあるが、中原4号墳の大型針のように、2本一組で使用された可能性が想定できることもある。正倉院の針には、同大の超大型品が2本ずつ知られ、奈良時代には針の員数を示す助数詞として片一方であることを表す「隻」が用いられている。儀式の中では針を2本一組で用いることが多かったことを示している。

共伴遺物 堅穴系埋葬施設の事例を中心に、葬送儀礼における針の使用方法が判明する出土状態を瞥見しておこう。埋葬施設内の細部における針の共伴関係を整理すると、農工具と混在するもの、堅節や玉類など装身具と共伴するもの、滑石製品とともに用いられるもの、単体で出土するもの、などが認められる。中でも農工具との共伴関係は各時期を通じて認められる。とくに、岡山県金蔵山古墳の事例は注目できる。金蔵山古墳では中央施設副室に収められた合子内から多くの鉄製農工具が出土しているが、同一の合子内には針も収められている。針が農工具と同様に生産用具の一種として認識されていたことを示す事例といえるだろう。中原4号墳の事例も農工具や鍛冶具との共伴関係が認められるので、生産用具の一種として副葬された意味合いが強いと判断しうる。

いっぽうで、針が被葬者の頭部を中心に鏡や装身具などと近接して出土する事例や、白玉や有孔円盤、琴柱形石製品などと共に出土する事例も一定量認められる。こうした事例は鏡や装身具、滑石製模造品と同様に、針が被葬者を邪悪なものから遠ざける辟邪の呪具として用いられていた可能性を想定しうる。針が単体で出土する場合も、辟邪の祭祀具として使用された可能性を考慮すべきであろう。

針と性別 針が出土した埋葬施設に性別が判明する人骨が伴う事例は、現状で13例知られる。このうち男性人骨に伴う事例が4例、女性人骨に伴う事例が8例、男・女両方の人骨が伴う事例が1例ある。男性人骨と針との共伴関係が認められるので、針の副葬は必ずしも女性被葬者に限定できないことが分かる。人骨が遺存しない事例において、被葬者の性別を考える上では鍬の有無が有効である（清家 1996）。古墳副葬品のうち、鍬は男性被葬者との強い関連がうかがえ、鍬が共伴する事例については、被葬者の性別は男性である可能性が高いと捉えられよう。被葬者との関連が捉えにくい後期の横穴式石室の事例を省くと、比較が有効とみられる112例中、鍬が共伴する事例が57例、共伴しない事例が55例と、ほぼ同数である。鍬をもたない埋葬施設の被葬者を女性と断定することができないが、兵庫県梅田1号墳例のように、鍬を伴う埋葬施設においても、男女2体の埋葬が想定できるような事例があり、個別の吟味が必要である。また、広島県地蔵堂山1号墳や福岡県奴山正園古墳など、針が古墳の被葬者とは異なる位置で滑石製模造品と共に出土する事例もある。鍬を伴うこれらの埋葬施設においても、針は被葬者に直接かわるものでなく、辟邪の祭祀具として用いられたと解釈することができるだろう（註13）。

針副葬の意義 以上、古墳から出土する針について、その特徴を瞥見してきた。中原4号墳から出土した針は農工具や鍛冶用具と共伴しており、生産用具のひとつとして用いられていたと考えられる。小型品12点以上と大型品2点の組合せは他に例がない充実した内容である。機能分化した2種の針を副葬することに、古墳被葬者が多様な布・皮革製品の生産と関わっていたことを読み取りたい。

6 後期古墳における生産用具副葬の意義

生産用具副葬の推移 中原4号墳で出土した豊富な生産用具の副葬の意義について触れておきたい。後期古墳に副葬される農工具の組成を考えるにあたり、まずは副葬農工具の種類や量が最も充実している中期古墳の事例を瞥見しておこう。第21表は古墳時代中期から後期に至る副葬農工具組成の推移を示す主要な事例を整理したものである。鉄製農工具の副葬・埋納事例として、種類や量が最も充実しているのが、古墳時代中期前半代である。この段階は鉄製農工具が小型化し、農工具形石製品も多くみられるなど、農工具の儀器化が進んでいる。地域の大首長墓や大王墓に近接する陪冢に伴う農工具の組成は共通性が高く、倭王権を中心とした祭祀の情報があり有力首長を通じて日本列島各地に共有されていたことが分かる（寺沢 1979）。なかでも、刀子、斧、鉋、鑿、鎌、鋤鋤の主要6種は副葬農工具の基本組成として多くの古墳で共通し、さらに充実した内容をもつ事例には手鎌や鋸、錐、刺突具などが加わる。

中期前半において、種類、量ともに頂点に達した農工具の副葬・埋納行為は、その後、中期後半を通して縮小化をたどる。小型化した農工具は依然として存続するが、何百点を超えるような多種・大量副葬はみられなくなる。後期に入ると農工具副葬はさらに少なくなり、刀子、斧、鎌などを副葬する程度に収束する。東日本においては農工具副葬の縮小傾向が顕著で、全長100mを超えるような大型前方後円墳であっても、副葬品の中に農工具が見出せない事例も多い。中原4号墳にみられる豊富な農工具副葬は、時期的にも、地域的にも、突出した事例であり、在来的な儀礼行為としては理解しがたい事象といえる。



第217図 藤ノ木古墳から出土した農工具等

福岡県桑原石ヶ元12号

[illegible]

愛媛県片山4号

This illustration shows a collection of bronze artifacts. On the left, there are several small, irregular fragments and a long, thin, slightly curved object. In the center, there are two large, U-shaped objects, likely plectrums or hooks, with a central slot. To the right, there are more small fragments and a long, thin, slightly curved object.

愛媛県高橋岡寺1号

奈良県石光山30号

奈良県石光山38号

奈良県寺口千塚15号

奈良県寺口千塚14号

奈良県寺口冢17号

奈良県寺口忍海E5号

This block contains line drawings of artifacts from site E5. The artifacts include several small, pointed metal blades of varying sizes, a long, narrow rectangular strip with a central band, a long, thin, slightly curved object, and a larger, curved object with a band. The drawings are arranged in a row, showing the profile of each item.

奈良県寺口忍海H13号

A horizontal number line is shown, starting at 0 and ending at 20 cm. There are 10 equal intervals between 0 and 20 cm. A tick mark is placed at the 2nd interval from 0, labeled $\frac{1}{6}$.

第 218 図 後期古墳における農工具組成

第22表 後期古墳の副葬農具と関連資料

古墳名	時 期	墳形	農具類										鍛冶具	砥石	その他生産用具等
			刀子	斧	鉋	鑿	鎌	鍬鋤	鋸	錐	針				
比較対象古墳															
中原 4 号	TK43 (新)	円墳	4	3	5	1	3	4			14+	1	2	鍬子 1	
中期 大王墓陪家、首長墓															
金蔵山 (中・合子内)	中期中頭	後円	8	11	33	40	19	8	9	42	30±			手鎌 30、漁具ほか	
西墓山 (西)	TK73 並行	方墳	45+	139+	148+	132+	237+	294+	12+	9+				手鎌 72+	
アリ山 (北)	TK73 並行	方墳	151	134	14	90	201	49	7	1					
堂山 (前)	TK73 並行	後円	14+	11	4	5	28	6	1	8				手鎌 19、鉄柄斧 1	
五ヶ山 B2 号	TK73 並行	方墳	3	6	8+	4+	7	3		3			1	刺突具 4	
野中 (2・3・5)	TK216	方墳	2	30	8	2	2	15		45				手鎌 35、刺突具 2	
大谷	TK47	後円	5+	15	14+	18	10+	8							
中期 鍛冶具出土古墳															
池の上 6 号	TG232 並行	円墳	1	1								2			
五條猫塚	TK73 並行	方墳	6+	7	4+	3+	1					8+	6		
随庵	TK216 並行	帆立	1	5	7	3	2			1	9+	4+	1	漁具	
新原・奴山 1 号	TK208	後円		2	3	3				1	2	3			
ホウジ 1 号	TK23 ～ 47 ?	円墳	3	1	2	1	1	1	(1)			3	1		
寺口忍海 H16 号	TK47	円墳	5	2	3	1		1				4	1		
後期 奈良県の首長墓															
藤ノ木	TK43	円墳	21	19	20	27	7	2			17±				
二塚 (造出)	TK43	後円		3	1	1	1	3			10				
後期 奈良県の群集墳															
石光山 7 号	MT15	円墳	2	1			1								
石光山 20 号	MT15 ～ TK10	円墳	4	1				4							
石光山 4 号	TK10	後円	2	4	1		1						1		
石光山 30 号	TK10	円墳	1	1	1	(1)	1	1							
石光山 38 号	TK10 (新)	円墳	1	3		(1)	1	1							
石光山 31 号	TK209	円墳	1									1			
寺口千塚 15 号	MT15	円墳	1	1	1		1								
寺口千塚 16 号	TK10	円墳	4	2			3				1				
寺口千塚 11 号 (3)	TK10	円墳	1				1								
寺口千塚 10 号	TK43	円墳	1				1	1							
寺口千塚 14 号	TK43	円墳	2		1		1								
寺口千塚 17 号	TK43	円墳	1	1		1	1								
寺口忍海 D27 号	TK47	円墳	8	4	3	2	3	4						石製紡錘車 1	
寺口忍海 E3 号	MT15	円墳	3	1				1							
寺口忍海 E5 号	TK10	円墳	3	1	1	2	3	1							
寺口忍海 E7 号	TK10	円墳	4			1	1	1							
寺口忍海 H1 号	TK10	円墳	2		2	1								鉄製紡錘 1	
寺口忍海 H13 号	TK10	円墳	3	1		1	2	1							
寺口忍海 H15 号	TK10	円墳	1	1	1		1								
寺口忍海 H5 号	TK10 (新)	円墳	1	3											
寺口忍海 H11 号	TK43	円墳	4	2			1								
中期末～後期 北部九州の首長墓															
小正西 (2)	TK47	円墳	4	1	3	1			1			1		鍬子 2	
番塚	TK47	後円	4	2	1										
山の神	TK47	後円	2	13	1	2		3						鋳造鉄斧 10+	
樋山	TK47 ～ MT15	(横穴)	1	5	(2)	2	4	1						大型鎌 2	
正籠 3 号	MT15	後円	7	1	1										
柏原 A2 号	TK43-209	後円	5+	1		(1)	1	1						手鎌 ?1	
後期 北部九州の群集墳															
吉武 S8 号	MT15	円墳	1+	3	(1)	(1)	2								
吉武 S9 号	MT15	円墳		4			1								
吉武 S27 号	TK10	円墳		2			2								
吉武 S11 号	TK10 (新)	円墳	1+	3			1	1							
赤坂鳥毛 1 号	TK43	円墳	6+		1							3	2	鍬子 1	
桑原石ヶ元 12 号	TK43	円墳	6+	1	1	1			1			5			
新原・奴山 44 号	TK43	円墳	2	2	4+	2+			1					銚 1、苧引金 1	
亀田道 4 号	TK43-209	円墳	2+	2			2	1							
後期 愛媛県の群集墳															
高地栗谷 1 号	MT15-TK10	後円	7	1	(1)		2	1						石製紡錘車 1	
片山 1 号	TK43	(円墳)	7	2	1		1							鉄鐔 2	
片山 4 号	TK43	円墳	10 +	4		2	2	3						刺突具 8	
片山 7 号	TK209	円墳	4+	2			3	1					1	鉄芯石製紡錘車 1	
高橋岡寺 1 号	TK43	円墳	17	4	4	2	3	1							
治平谷 2 号 (2)	TK10(新)	円墳	1	2			1	1							
治平谷 3 号 (1)	TK10(新)	円墳	2	1			3	1							
法華寺裏山	(TK43-209)	円墳	6	1			4	1						輪羽口 1	
旦 13 号	TK10(古)	円墳	2	1	1		2	1							
端華の森 (1)	(TK209)	円墳	11	1			3	1	(1)						
上難波南 0 号	(TK43-209)	－	4	1	1		3	3							
庄の谷	(TK10)	円墳	(2)	(2)	1	1		1							
庄 1 号	(TK43-209)	(方墳)	5	3			2	1							
片山 1 号	(TK10-43)	－	2		1	1	1	1							
北谷王神ノ木 1 号	TK43	円墳	4	2	2		1								
塚本 1 号	TK217	(方墳)	3	3		1						2			
瀬戸風峠 1 号	TK10(新)	－	5	3	3	7	4	3							
東山蔭が森 4 号 (A)	TK209-217	円墳	14	2	1		1								
東山蔭が森 8 号 (A)	TK43	円墳	7	1	2		2								

凡例は第20表・第21表に準拠

後期古墳における生産用具副葬 6世紀における生産用具の副葬状況は地域ごとの相違が顕著である。縮小傾向はあるものの、西日本地域では生産用具の副葬行為は残存する。なかでも、北部九州や愛媛県域、奈良県域などに農工具を多く副葬する古墳が目立ち、その他の地域との差異が顕著である。

筑紫を中心とした北部九州においては、農工具を3種類以上副葬する後期古墳が首長墓および中小規模の古墳ともに一定量認められる（松浦 2014）。また、鉄鉋を中心とする鍛冶具を副葬する後期の中小古墳が多いことも特徴的である。

愛媛県域においては比較的小規模な古墳を中心に農工具が豊富に副葬されている。また、実用的な大きさのU字形鍬鋤先の副葬も6世紀後半まで広く残存していることも特徴的である（十亀編 2013、第218図）。農工具を豊富に副葬する古墳は今治市域から松山市域に集中する。6世紀の瀬戸内地域の中でも、この地域における農工具の副葬量は群を抜いて多い。この地域では、5世紀から陶質土器の移入が多く、この他にも、外来系の遺物、遺構が多く確認できる。古墳時代中期から後期にかけて、渡来系集団が集中的に移動した地域と評価しうる。

奈良県域ではU字形鍬鋤先を模倣した独特の雛形品が出現し、藤ノ木古墳（第217図）のような大首長墓のほか、葛城地域を中心とした中小古墳に多く副葬される（白石 1997、坂 2005）。また、近畿地方の多くの群集墳において農工具の副葬が減少するなかで、石光山古墳群、寺口千塚古墳群、寺口忍海古墳群など葛城地域に築造される群集墳には、農工具を豊富に副葬する中小古墳が多くみられる。

このように、6世紀以降の生産用具については、副葬するかしないかの選択、副葬する生産用具の種類や数、さらには局所的な特殊形態の発達など、地域ごとの違いが顕著といえるだろう。6世紀以降、生産用具を用いた儀礼は、日本列島の規模で規律が貫徹されていなかったと評価できる。

中原4号墳における生産用具副葬の意義 在来古墳祭祀の中に生産用具を豊富に副葬する伝統がみられないことをふまえると、中原4号墳における生産用具の副葬行為に、被葬者の出自や職掌などを積極的に読み取ることが許されよう。研究史の項目で触れたとおり、古墳に副葬される生産用具については、地鎮用具や建築用

具などと限定するのではなく、広く農耕・手工業生産にかかわる儀礼用具と捉えておく方が妥当と考えられる。古墳副葬の生産用具としては、農工具が一般的であるが、この他にも、鉾やヤスなどの漁具、鍛冶用具などの鉄器生産用具、紡錘車や機織具、針といった布・皮革製品生産用具などがある。これらの生産用具は、副葬状況から、互いに近似した儀礼用具として扱われていたことがうかがえ、被葬者の生前の性格や職掌を示すものと捉えられる。

鉄鉋の副葬には、鉄器生産や加工技術に長けた技術者集団との密接な関係を想定することができる。東駿河の地において鉄器の生産や加工に従事した集団の中には渡来人が含まれていた可能性も充分想定できるだろう。また、特異ともいえる豊富な生産用具の副葬行為からは、中原4号墳の被葬者が、北部九州や、愛媛県域（今治・松山地域）、奈良県域（葛城地域）といった生産用具を豊富に副葬する地域と何らかの関係をもっていた可能性も指摘しうる。

これらの地域には、渡来系の埋葬施設である竪穴系横口式石室や、段構造をもつ無袖石室が多くみられることも注目できる。中原4号墳に築かれた横穴式石室の系譜を考究する上でも、石室形態が共通するこれら遠隔地との関係を想定する視点が求められるだろう（本書第4章第2節、藤村論考）。

結 語

中原4号墳から出土した豊富な生産用具の特徴を整理する作業を通じ、後期古墳における生産用具を用いた祭祀の変容過程を明らかにした。とくに、手工業生産や加工技術に長けた中小勢力には生産用具の副葬が残存し、遠隔地どうして集団間の関係が想定しうることは重要である。

さいごに、中原4号墳から出土したこの他の副葬品についても簡単に触れておきたい。中原4号墳から出土した須恵器は数や種類が多く、生産地も複数にまたがるとみられる。豊富な副葬須恵器の様相から判断すると、中原4号墳の被葬者は須恵器の生産主体とも密接な関係を有していたと解釈しうる。また、外来系器種である把手付碗の保有は、この古墳の被葬者が渡来系集団と関係をもっていた可能性も指摘できるだろう（本書第4章第9節、和田論考）。

中原4号墳から出土した武器や馬具は、日本列島の各地で共通する特徴がうかがえることから、その入手の経緯には、倭王権の関与があったことがうかがえる(本書第4章第7節、菊地論考、同第6節、大谷論考)。100点を超える鉄鏃の出土量は周辺の古墳と比較しても群を抜いており、本墳の被葬者が極めて武人的な性格を強く帯びていたことが理解できよう。また、本墳から出土した武器や馬具は必ずしも最高位の首長の持ち物とはいえないことも重要である。武器や馬具に明確な階層性が看取できることを考慮すると、その流通、保有の背後には倭王権の統制力が働いていたとみることが妥当であろう。

さらに、中原4号墳から出土した玉類には、愛知県西部(尾張)以西の西日本にみられる諸特徴が看取できることも注目できる(本書第4章第5節、戸根論考)。この検討結果は、中原4号墳の被葬者が西日本地域と強い繋がりをもっていたことを伝えるものである。玉類の特徴から被葬者の出自にまで踏み込めるかは、さらに慎重な検討が必要であるが、石室や生産用具副葬の評価とも整合的な西日本地域との関係は、手工業技術の東方移転のあり様を考える上でも示唆的である。

以上、本稿で明らかにした生産用具の位置づけと、石室やその他の副葬品にみる諸特徴とその評価が、互いに関連づけて理解しうることが確認できた。中原4号墳の被葬者には、倭王権との軍事的な結びつきを前提に、近畿地方や西日本地域の渡来系集団と関係を持ち、駿河の地に新たな産業をもたらした技術者集団の統括者としての性格を読み取ることができる、と結論づけることができるだろう。

謝 辞

本稿をなすにあたり、次に示す方々からご協力、ご教示を得た。その名を記し、深く謝意を表す。

大谷 宏治、金澤 雄太、草野 潤平、清家 章、
高田 健一、田中 祐介、田邊 朋宏、辻川 哲朗、
濱崎 範子、藤藪 勝則、松崎 友理、山内 英樹、
若杵 義満、車 順哲、李 東冠、李 承一

註

- 1 本墳から出土した刀子の総数は10点以上であるが、このすべてを生産用具とはみなしがたい。詳細は本文中で述べるが、出土位置と形態的特徴から、生産用具としての刀子は4点と捉えている。
- 2 中原4号墳における針の正確な副葬数は不明である。最低でも14本の副葬が認められるので、ここでは最低限の点数をあげる。
- 3 Aエリアの副葬品については、初葬に伴う遺物が片付けられてこの位置に移動したと捉えられる。鏃がA・Bエリアの双方から出土していることをふまえると、当初はBエリア付近に置かれたものである可能性がある。
- 4 伊勢神宮における祭祀の詳細を記した「皇太神宮儀式帳」や「止由気宮儀式帳」に記される儀礼に用いた儀礼用具の組合せを整理すると、鉾鋤を用いる祭祀の場面が異なることが知られる。また、養老律令中の「軍防令」には、兵士の装備にかかわる規定があり、行軍の際には、大小の斧と2点の鏃、さらに最低限の修復をするための鉄鉗が組み合うことが記される。これらの記述はそのまま中原4号墳の生産用具の解釈に結び付けられるものではないが、生産用具の使用場面を考えるうえで、参照すべきことがらといえるだろう(関川1987)。
- 5 Aエリアから出土した刀子には、茎の破片として報告されている木柄付の小片が2点(591、593)ある。これらの破片は鉾の茎である可能性もあり、刀子の総数に計上していない。
- 6 本墳から出土した砥石は全長9.2～9.4cmであり、鍛冶具と共伴する砥石の中では小型である。積極的に鍛冶具として評価することは難しいといえるだろう。
- 7 小型品の中には、鍛金や彫金などの金工用具として用いられたもの(香取ほか1986)も含まれる可能性がある。しかし、大きさだけをもって金工の専用工具と限定することは難しい。本稿では、小型品についてもその多くは鍛冶用具として認識して議論を進める。
- 8 このほか兵庫県茶すり山古墳にも先端が尖った細長い円柱棒があり、大型針の類例に加えられる可能性がある。
- 9 日本列島における鉄針の最古例として、集落からの出土品であるが、長野県松本市向畑遺跡例をあげうる。この事例は竪穴建物から出土したものであるが、共伴遺物には新旧の遺物相があり、その時期認定については評価が分かれる(亀田2016)。ただし、竪穴建物から出土した新旧二相に分かれる土師器は、古相のものも古墳時代中期より近い時期を想定することが可能である。また、新相のものは確実に中期のものといえる。この事例をもって、日本列島における鉄針の出現が前期に遡るとは積極的に言いにくい。確実な前期古墳からの出土例が確認できるまで、この事例の帰属時期については保留しておきたい。
- 10 金属製針は形態的に単純で微少な遺物であることから、その認定について慎重に臨む必要がある。古墳出土の金属針の集成として知られる[楠本・朴編1986]や[大谷2012]にあげられる事例においても、針と認定できないものが含まれる。本稿で検討外とした事例は次の通りである。組合せ式のヤスなど別の用途をもった道具の可能性が高いもの：福井県天神山7号墳例、滋賀県

雪野山古墳例、京都府瓦谷古墳例、京都府寺戸大塚古墳例、和歌山県崎山14号墳例。鉄鎌の茎の可能性が高いもの：神奈川県三ノ宮・下谷戸7号墳例。再整理の過程で針であることが否定されているもの：鳥取県古郡家1号墳例（高田編2013、p.35）。

- 11 正倉院宝物として伝えられる針には大小が認められる。大型のものは長さ約35cmで銀製・銅製・鉄製の3種が、小振りのものは長さ約20cmで銀製・鉄製の2種がある。これらの大型針は、七月七日に行う乞巧奠（きっこうでん、針仕事の上達を祈願して織女を祀る儀式）に用いる儀礼用具だという（正倉院事務所1996）。奈良県寺口忍海例E12号墳や山口県糠塚横穴墓群で出土している青銅製の針（前者は全長11.0cm、後者は5.1cm）がその祖形にあたる可能性がある。
- 12 古墳時代前期の針は、前方後方墳からの出土例が多い。副葬品目の違いが古墳祭式の細差を示すのか、検討を要する。
- 13 針と女性の関係を重視するなら、辟邪の呪具として針を用いる発想の根源に「女性の霊力」がかかわっている可能性もある。

参考文献

- 安部 梨子 1969「針状鉄器」『我孫子古墳群』我孫子町教育委員会
- 諫早 直人 2008「鐮子状鉄製品と初期の轡」『大隈申良 岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合博物館
- 入江 文敏 1998「佩低考—日韓出土資料の検討—」『網干義教先生古稀記念考古学論集』網干義教先生古稀記念会
- 岩本 崇 2015「いわゆる古墳出土「鍛冶具」と五條猫塚古墳にみる副葬工具組成の特質」『五條猫塚古墳の研究 総括編』奈良国立博物館
- 魚津 知克 2005「鉄製農工具の副葬と農工具形石製祭器の副葬」『古代』第118号 早稲田大学考古学会
- 大谷 宏治 2010「須津J-第6号墳出土の鉄針について」『富士山・愛鷹山麓の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大谷 宏治 2012「古墳出土の金属製針について」『研究紀要 創刊号』静岡県埋蔵文化財センター
- 加藤 俊吾 1997「鉄製鍛冶工具の基礎的分析（前編）」『大阪市立博物館研究紀要』第29冊
- 加藤 俊吾 1998「鉄製鍛冶工具の基礎的分析（後編）」『大阪市立博物館研究紀要』第30冊
- 香取 正彦ほか 1986『金工の伝統技法』理工学社
- 亀田 修一 2016「4、5世紀の日本列島の鉄器生産集落—韓半島との関わりを中心に—」『日韓4～5世紀の土器・鉄器生産と集落』「日韓交渉の考古学—古墳時代—」研究会
- 楠元 哲夫・朴 美子（編）1986「針出土地名表」『宇陀北原古墳』大宇陀町
- 小林 行雄 1961『古墳時代の研究』青木書店
- 潮見 浩 1982『東アジアの初期鉄器文化』吉川弘文館
- 潮見 浩・和島 誠一 1966「鉄および鉄器生産」『日本の考古学V』河出書房
- 正倉院事務所 1996『正倉院宝物8 南倉Ⅱ』毎日新聞社
- 白石 太一郎 1985「神まつりと古墳の祭祀—古墳出土の石製模造

品を中心として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館

- 白石 太一郎 1997「藤ノ木古墳出土農工具の提起する問題」『国立歴史民俗博物館研究報告』第70集 国立歴史民俗博物館
- 鈴木 一有 1999「副葬遺物にみる先進性と特殊性」『五ヶ山B2号墳』浅羽町教育委員会
- 清家 章 1996「副葬品と被葬者の性別」『雪野山古墳の研究 考察篇』八日市市教育委員会
- 関川 尚功 1987「畿内中期古墳出土の鉄製農工具について」『横田健一先生古稀記念文化史論叢』横田健一先生古稀記念会
- 十亀 幸雄（編）2013『遺跡』第47号（特集◎愛媛の鉄製農工漁具）遺跡発行会
- 武田 寛生 2003「東海地域における後期古墳出土農工具について」『研究紀要』第10号（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 田中 新史 1994・1995「使用具の古墳埋納（上）・（下）」『古代』第98・100号 早稲田大学考古学会
- 都出 比呂志 1967「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』第13巻第3号 考古学研究会
- 寺沢 知子 1979「鉄製農工具副葬の意義」『榎原考古学研究所論集 第四』吉川弘文館
- 野上 丈助 1968「古墳時代における鉄及び鉄器生産の諸問題」『考古学研究』第15巻第2号
- 花田 勝広 2002『古代の鉄生産と渡来人—倭政権の形成と生産組織—』雄山閣
- 濱崎 範子 2008「韓半島出土の鉄製鍛冶具について」『朝鮮古代研究』第9号 朝鮮古代研究刊行会
- 坂 靖 2005「小型鉄製農工具の系譜—ミニチュア農工具再考—」『考古学論攷』第28冊 奈良県立榎原考古学研究所
- 平ノ内 幸治 1984「針について」『神領古墳群』宇美町教育委員会
- 広瀬 和雄 2003『前方後円墳国家』角川書店
- 古瀬 清秀 1977「古墳出土の鉈の形態的变化とその役割」『考古論集—慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集—』松崎寿和先生退官記念事業会
- 古瀬 清秀 1991「農具」『古墳時代の研究』8古墳Ⅱ 副葬品 雄山閣
- 間壁 霞子 2000「金藏山古墳出土の針」『古代学研究』150号
- 松井 和幸 1991「古代の鍛冶具」『古文化論叢』児島隆人先生喜寿記念事業会
- 松浦 宇哲 2014「古墳出土農工具からみた北部九州の地域性—福岡県内出土例を中心に—」『古墳時代の地域間交流2』九州前方後円墳研究会
- 村上 恭通 2004「古墳時代における鍛冶具副葬古墳と被葬者像—中期を中心として—」『河瀬正利先生退官記念論文集 考古論集』
- 柳沢 一宏 1994「鉄製農工具類副葬からみた古墳の画期」『榎原考古学研究所論集』11
- 吉川 金次 1991『鍛冶道具考』平凡社
- 李 東冠 2012「九州出土の鉄製農工具と鍛冶関係遺物からみた対外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』第15回九州前方後円墳研究会 北九州大会発表要旨・資料集

ハングル文献

車順喆 2003「鍛冶具所有者についての研究」『文化財』第36号
申東昭 2013「初期鉄器時代～三国時代蔚山地域鉄製品の流通」『蔚山鉄文化』蔚山博物館
金銀珠 2007『三国時代鍛冶具研究―嶺南地方を中心として―』嶺南大学大学院

本稿で触れた古墳、遺跡にかかわる文献

山形

お花山1号：山形県教育委員会 1985『お花山古墳群』
大之越：山形県教育委員会 1979『大之越古墳発掘調査報告書』
福島
餓鬼堂1号横穴：いわき市教育委員会 2009『餓鬼堂横穴墓群』
郭内6号横穴：白河市 2001『白河市史』第四巻 資料編1 自然・考古
森北1号墳：会津坂下町教育委員会 1999『森北古墳群』

茨城

上出島2号：岩井市教育委員会 1975『上出島古墳群』
三味塚：茨城県教育委員会 1960『三味塚古墳』
原1号：茨城県 1974『茨城県史料』、浮島研究会 1976『常陸浮島古墳群』

栃木

中島笹塚1号：とちぎ生涯学習文化財団 2008『東谷・中島地区遺跡群9 中島笹塚古墳群・中島笹塚遺跡』

群馬

弦巻：後藤 守一ほか 1929「多野郡平井村白石稲荷山古墳」『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告三』
前橋天神山：群馬県 1981『群馬県史』資料編3 原始古代3 古墳

埼玉

埼玉稲荷山：埼玉県教育委員会 1980『埼玉稲荷山古墳』

千葉

江子田金環塚：市原市教育委員会 1985『上総江子田金環塚古墳』
山王山：市原市教育委員会 1980『上総山王山古墳』
城山1号：小見川町教育委員会 1978『城山第一号前方後円墳』
水神山：我孫子町教育委員会 1969『我孫子古墳群』

東京

殿山1号：茂木 雅博 1975「殿山1号墳」『世田谷区史料』第8集 考古編 世田谷区

神奈川

さんせ塚：甘粕 健・久保 哲三 1966「関東」（関東主要古墳分布表）『日本の考古学IV』河出書房
下谷戸7号：かながわ考古学財団 2000『三ノ宮・下谷戸遺蹟II』
石川
秋常山2号：能美市教育委員会 2011『史跡秋常山古墳群』
中島ヤマンタン25号：石川県埋蔵文化財センター 2002『中島ヤマンタン25号墳』

西山9号：寺井町教育委員会 1997『加賀能美古墳群』

福岡

獅子塚：[濱崎 2008]

花野谷2号：福井市教育委員会 2012『福井市古墳発掘調査報告書I』

長野

竜丘古墳群：長野県 1988『長野県史 考古資料編 全一卷(四)遺構・遺物』

如来堂：[野上 1968]

向畑遺跡：松本市教育委員会 1989『松本市向畑遺跡II』

岐阜

昼飯大塚：大垣市教育委員会 2003『史跡昼飯大塚古墳』
船木山O274号：糸貫町教育委員会・本巣町教育委員会 1999『船木山古墳群』
龍門寺1号：岐阜市教育委員会 1962『岐阜市長良龍門寺古墳』

静岡

岩田山21号：藤枝市 2007『藤枝市史』資料編1
春林院：春林院古墳調査委員会 1966『春林院古墳』、静岡大学考古学研究室 2011『春林院古墳の研究』
須津J6号：静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010『富士山・愛鷹山麓の古墳群』

田頭山1号：静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004『田頭山古墳群』

高代山4号：掛川市教育委員会 1970『高代山古墳群』

愛知

東之宮：犬山市教育委員会 2014『史跡東之宮古墳』

三重

石山：京都大学博物館 1993『紫金山古墳と石山古墳』

滋賀

雪野山：八日市市教育委員会 1996『雪野山古墳の研究』
湧出山C号：高月町教育委員会 2007『高月の主要古墳III』

京都

井ノ内稲荷塚：大阪大学考古学研究室 2005『井ノ内稲荷塚古墳の研究』
入谷西D1号：加悦町史編集委員会 2007『加悦町史』資料編 第一巻

宇津久志1号：長岡京市 1991『長岡京市史』資料編1、長岡京市教育委員会 1993『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度

大田南6号：峰山町教育委員会 1998『大田南古墳群／大田南遺跡／矢田城跡第2次～第5次発掘調査報告書』

奥大石2号：京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990『京都府遺跡調査概報』第37冊

郷土塚4号：小池 寛 1988「鍛冶道具副葬の新例―田辺町郷土塚4号墳―」『京都府埋蔵文化財情報』第29号

里ヶ谷3号：京都府埋蔵文化財センター 1993『京都府遺蹟調査概報』55

芝ヶ原10・11号：城陽市教育委員会 1986『芝ヶ原10号・11号墳発掘調査概報』『城陽市埋蔵文化財調査報告書』15、城陽市 1999『城陽市史』第三巻

上人ヶ平16号：京都府埋蔵文化財センター 1991『京都府遺蹟調査報告書』15

園部垣内：同志社大学文学部文化学科 1990『園部垣内古墳』

西山1号：同志社大学考古学研究会 1962「久津川古墳群の研究」『同

志社考古』2

畑大塚：久美浜町教育委員会 1988『畑大塚古墳群』

平山：京都府埋蔵文化財センター 2001『京都府遺蹟調査概報』97

大 阪

風吹山：岸和田市教育委員会 2014『久米田古墳群発掘調査報告 2』

雁多尾畑：[花田 2002]

心合寺山：八尾市教育委員会 2001『史跡心合寺山古墳発掘調査報告書』

弁天山 D2 号：大阪府教育委員会 1967『弁天山古墳群の調査』

紅茸山 C3 号：高槻市 1973『高槻市史』考古編

百舌鳥大塚山：末永 雅雄 1961『日本の古墳』朝日新聞社、森 浩一 2003『失われた時を求めて―百舌鳥大塚山古墳の調査を回顧して―』『堺市博物館報』第 22 号 堺市博物館、[花田 2002]

兵 庫

梅田古墳群：兵庫県教育委員会 2002『梅田古墳群 I』

大寺山古墳群：[大谷 2012]

柿坪中山：山東町教育委員会 1978『柿坪中山古墳群』

カチヤ：兵庫県教育委員会 1983『半坂峠古墳群・辻遺跡』

カンス塚：[野上 1968]、加古川市教育委員会 1985『カンス塚古墳』、川畑 純・初村 武寛 2012『加古川市域の中期古墳出土鉄製品の再検討』『加古川市西条古墳群 尼塚古墳』加古川市教育委員会
行者塚：加古川市教育委員会 1997『行者塚古墳発掘調査概報』

田和：大屋町教育委員会 1992『大屋の遺跡 2』

タンダ山 2 号：加西市 2010『加西市史』第七巻 資料編 1 考古

茶すり山：兵庫県教育委員会 2010『史跡茶すり山古墳』

鳥坂 3 号：竜野市教育委員会 1984『鳥坂古墳群』

深谷 1 号：但馬考古学研究会 1985『中ノ郷・深谷古墳群』

ホウジ 1 号：豊岡市教育委員会 1986『長谷・ホウジ古墳群・妙楽寺・見手山横穴墳墓群』

奈 良

池殿奥 5 号：橿原考古学研究所 1988『野山遺跡群 I』

市尾今田 1 号：橿原考古学研究所 1983『奈良県遺跡調査概報』1981 年度、[楠本・朴（編）1986]

イノヲク 1 号：[花田 2002]

後出 6 号：橿原考古学研究所 2003『後出古墳群』

大谷今池 2 号：橿原考古学研究所 2003『大谷今池 1 号墳・2 号墳』

北原：橿原考古学研究所 1986『宇陀北原古墳』大宇陀町

北原西：楠本哲夫・朴美子ほか 1993『北原西古墳の発掘調査』『大和宇陀地域における古墳の研究』

五條猫塚：奈良県教育委員会 1962『五条猫塚古墳』、奈良国立博物館 2015『五條猫塚古墳の研究 総括編』

境谷 4 号：奈良県教育委員会 1974『大和巨勢山古墳群（境谷支群）』

桜井茶白山：奈良県教育委員会 1961『桜井茶白山古墳』

タニグチ古墳群：橿原考古学研究所 1996『タニグチ古墳群』高取町教育委員会

寺口忍海古墳群：橿原考古学研究所 1988『寺口忍海古墳群』

寺口千塚古墳群：橿原考古学研究所 1991『寺口千塚古墳群』

火野谷山 2 号：橿原考古学研究所 1979『新庄火野谷山古墳群』

藤ノ木：橿原考古学研究所 1990『斑鳩藤ノ木古墳第一次調査報告書』

双築 1 号：桜井市文化財協会 2007『桜井公園遺跡群』

布留遺跡：埋蔵文化財天理教調査団 1995『布留遺跡三島（里中）地区発掘調査報告書』

ベンショ塚：奈良市教育委員会 1991『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 2 年度

菩提寺 2 号：[花田 2002]

ホリノヲ 2 号：奈良県教育委員会 1975『天理市石上・豊田古墳群 I』

前山 1 号：橿原考古学研究所 1987『能峠遺跡群 II』

見田大沢 1 号：橿原考古学研究所 1982『見田・大沢古墳群』

大和二塚：奈良県教育委員会 1962『大和二塚古墳』

ヲトンダ 4 号：橿原考古学研究所 1991『高田垣内古墳群』

和歌山

岩内 3 号：御坊市教育委員会 1980『岩内古墳群発掘調査概報』、『岩内 3 号墳』刊行会 2014『和歌山県御坊市 岩内 3 号墳』

大谷：和歌山市教育委員会 1959『大谷古墳』

大日山 70 号：和歌山県教育委員会 2000『岩橋千塚周辺古墳群緊急確認調査報告書』

崎山 14 号：印南町教育委員会 1978『崎山 14 号墳（切目崎の塚穴）発掘調査報告書』

箱谷 3 号：川辺町教育委員会 1984『箱谷古墳群―昭和 58 年度発掘調査概報―』、菊井 佳弥ほか 2003『箱谷 3 号墳の再検討―紀伊における埴輪研究 2―』『紀伊考古学研究』第 6 号

鳥 取

青谷上寺地：鳥取県埋蔵文化財センター 2010『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 5 骨角器（1）』

糸谷 3 号：同志社大学文学部文化学科 1994『糸谷古墳群』

狼谷：谷田 亀寿・佐々木 謙 1956『伯耆・土下狼谷古墳』『ひすい』30、山本 清 1971『山陰古墳文化の研究』

桂見 2 号：鳥取市教育委員会 1984『桂見墳墓群』

日下 12 号：米子市教育委員会 1992『日下古墳群発掘調査報告書』

古郡家 1 号：高田 健一（編）2013『古郡家 1 号墳・六部山 3 号墳の研究』鳥取県

高畔 2 号：倉吉市 1973『倉吉市史』

浜坂横穴墓群：[大谷 2012]

宮内 2 号：鳥取県教育文化財団 1996『宮内第 1 遺跡 宮内第 4 遺跡 宮内第 5 遺跡 宮内 2・63 ～ 65 号墳』

六部山古墳群：鳥取市教育福祉振興会 1995『六部山古墳群 II』

島 根

上島：出雲市教育委員会 2007『上島古墳出土遺物』『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 17 集

神原神社：加茂町教育委員会 2002『神原神社古墳』

小丸子山：近藤 正 1969『安来・小丸子山横穴』『島根県埋蔵文化財調査報告書』第 1 集

松本 1 号：島根県教育委員会 1963『松本古墳調査報告』

岡 山

一本松：村井 崑雄 1976『岡山市一本松古墳出土の甲冑』『MUSEUM』307

我城山 6 号：近藤 義郎 1969『備前邑久町我城山 6 号墳』『古代吉備』第 6 集

金蔵山：倉敷考古館 1959『金蔵山古墳』、間壁葎子 2000「金蔵山古墳出土の針」『古代学研究』150号

佐野山：総社市 1987『総社市史』考古資料編

勝央町内：〔花田 2002〕

勝負砂：岡山大学考古学研究室 2009『勝負砂古墳調査概報』学生社

随庵：総社市教育委員会 1965『随庵古墳』

竹之内：河本 清 1971「美作考古学の研究と課題」『古代古備』第7集

月の輪：月の輪古墳刊行会 1960『月の輪古墳』

ツルギ：岡山県 1991『岡山県史』第2巻 原始・古代

堂山5号：西川 宏 1963「岡山県吉備郡佐古田堂山古墳群（第1次調査）」『日本考古学年報』12

長畝山2号：坂本 心平 1996「長畝山2号墳出土の資料について」『年報津山弥生の里』第3号 津山弥生の里文化センター

七つ埴：七つ埴古墳群発掘調査団 1987『七つ埴古墳群』

西山26号：岡山県古代古備文化センター 1997『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』121

西吉田北1号：津山市教育委員会 1997『西吉田北遺跡』

旗振台：鎌木 義昌 1962「旗振台古墳」『岡山市史』古代編 岡山市役所

四ツ塚1号：上田 三平 1929「四ツ塚古墳」『文部省史蹟調査報告』6

四辻1号：山陽団地埋蔵文化財発掘調査団 1973『四辻土壙墓遺跡・四辻古墳群』

広島

上野部1号：〔松井 1991〕

才谷古墳群：広島県教育委員会 1976『県営駅字住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告』

三王原：〔潮見・和島 1966〕

地藏堂山：広島県教育委員会 1977『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』

福山市山の神：広島県立府中高等学校生徒会地歴部 1967『古代古備品治国の古墳について』、篠原芳秀 1991「山の神古墳」『探訪・広島古墳』芸備友の会

府中市山ノ神1号：府中市教育委員会 1983『府中・山ノ神1号古墳発掘調査報告』

山口

赤妻：弘津 史文 1928「周防国赤妻古墳並茶白山古墳（其一）」『考古学雑誌』第18巻第4号、山口市教育委員会 1997『赤妻古墳』

朝田Ⅰ-2号：山口県教育委員会 1976『朝田墳墓群Ⅰ 木崎遺跡』

朝田Ⅲ-7号：山口県教育委員会 1977『朝田墳墓群Ⅱ 鴻ノ峰1号墳』

朝田Ⅱ-12号：山口県教育委員会 1983『朝田墳墓群Ⅵ』

後井3号：山口県 2000『山口県史』資料編 考古1

形山石棺：山口県 2000『山口県史』資料編 考古1

国森：田布施町教育委員会 1988『国森古墳』

汐入町：山口県 2000『山口県史』資料編 考古1

心光寺2号：〔潮見・和島 1966〕

糠塚横穴墓群：山口県 2000『山口県史』資料編 考古1

香川

財田西：香川県教育委員会 1983『新編香川叢書』考古編

愛媛

猪の窪：長井 数秋 1984「伊予市猪の窪古墳発掘調査報告書」『愛媛考古学』第7号

かいなご1号：愛媛県 1986『愛媛県史』資料編 考古

片山古墳群：愛媛県埋蔵文化財センター 1984『一般国道196号今治道路埋蔵文化財調査報告書』

上難波南0号：愛媛県教育委員会 1982『北条市上難波古墳群』

雉ノ尾1号：愛媛県 1986『愛媛県史』資料編 考古

北谷王ノ神1号：松山市教育委員会 1991『北谷王神ノ木古墳・塚本古墳』

古国分：〔野上 1968〕

庄1号：愛媛県埋蔵文化財センター 1990『小山田Ⅱ遺跡・小山田支群』

庄の谷：北条市 1981『北条市誌』

瀬戸風峠1号：松山市教育委員会 1998『瀬戸風峠遺跡』

高地栗谷1号：今治市教育委員会 2010『高地栗谷1号墳』

高橋岡寺1号：今治市教育委員会 2009『高橋山岸古墳』

治平谷古墳群：今治市 1974『唐子台遺跡群』

塚本1号：松山市教育委員会 1991『北谷王神ノ木古墳・塚本古墳』

葉佐池：松山市教育委員会 2003『葉佐池古墳』

東山鷺が森古墳群：松山市教育委員会 1981『東山鷺が森古墳群』

法華寺裏山・旦13号：愛媛県埋蔵文化財センター 2000『一般国道196号今治バイパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』

松山市片山1号：北条市教育委員会 1999『片山遺跡・片山1号墳』

矢田大塚：神原賢 1970「上浦町瀬山古墳の報告」『愛媛の文化財』愛媛県文化財保護協会

若草4号：愛媛県埋蔵文化財センター 1996『若草遺跡Ⅱ』

福岡

赤坂鳥毛1号：夜須町教育委員会 2000『赤坂遺跡群Ⅰ』

池の上6号：甘木市教育委員会 1979『池の上墳墓群』

石垣古墳群：九州考古学会（編）1951『北九州古文化図鑑（2）』

馬渡束ヶ浦SF04：古賀市教育委員会 2011『馬渡・束ヶ浦遺跡3』

梅林：福岡市教育委員会 1991『梅林古墳』

大井平野1号：宗像市教育委員会 2004『大井平野』

奥ヤ子：菊田町教育委員会 1988『石塚山古墳発掘調査概報』

柿原Ⅰ-2号：福岡県教育委員会 1986『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』6

カクチガ浦3号：那珂川町教育委員会 1990『カクチガ浦遺跡群』

角田2号：福岡県教育委員会 1976『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第1集

欠塚：筑後市教育委員会 1993『欠塚古墳』

片縄丸ノ口Ⅴ-4号：那珂川町教育委員会 2003『片縄山古墳群』

萱葉1号：志免町教育委員会 1984『萱葉古墳群』

クエゾノ5号：福岡市教育委員会 1995『クエゾノ遺跡』

桑原石ヶ元12号：福岡市教育委員会 2003『元岡・桑原遺跡群2』

桑原A2・A4号墳：福岡市教育委員会 2005『元岡・桑原遺跡群5』

古寺 D10 号：甘木市教育委員会 1982『古寺墳墓群』

菖蒲浦 1 号：古都太宰府を守る会 1976『大宰府町の文化財 第 1 集 一菖蒲浦古墳群の調査』

新原・奴山古墳群：津屋崎町教育委員会 1989『新原・奴山古墳群』、津屋崎町教育委員会 2001『新原・奴山古墳群Ⅱ』

神領 2 号：宇美町教育委員会 1984『神領古墳群』

鋤崎：福岡市教育委員会 2002『鋤崎古墳』

惣社：豊津町教育委員会 1976「惣社古墳」『幸木遺跡調査報告』

七夕池：志免町教育委員会 2001『七夕池古墳』

手光南 2 号：福岡町教育委員会 1981『手光古墳群Ⅰ』

天神山：宇美町教育委員会 1984『神領古墳群』

徳永 B3 号：福岡市教育委員会 2014『徳永 B 遺跡 3』

永浦 4 号：古賀市教育委員会 2004『永浦遺跡』

七曲山 1 号：九州前方後円墳研究会 2005『九州における渡来人の受容と展開』

西尾山 1 号：福岡県教育委員会 1979『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXX

奴山正園：福津市教育委員会 2013『奴山正園古墳』

野口 2 号：那珂川町教育委員会 1979『野口遺跡』

櫛山：嶋田 光一 1991「福岡県櫛山古墳の再検討」『古文化論叢』児島隆人先生喜寿記念事業会

花立山横穴墓群：小郡市教育委員会 2000『花立山古墳群Ⅰ』、小郡市 2001『小郡市史』第四巻資料編

東入部 504 号：福岡市教育委員会 2001『入部Ⅸ』

広石南 A4 号：福岡市教育委員会 1999『広石南古墳群 A 群』

平等寺原 5 号：原 俊一 1997「特色ある古墳文化」『宗像市史』宗像市

古大内石棺：宇美町教育委員会 1984『神領古墳群』、苅田町教育委員会 2002『苅田地区遺跡群Ⅰ』

古川平原 5 号：犀川町教育委員会 1997『古川平原古墳群』

妙見 8 号：福岡県立朝倉高等学校史学部 1969『埋もれていた朝倉文化』

山ノ口 5・6 号：宗像市教育委員会 1984『朝日山ノ口Ⅰ』

老司：福岡市教育委員会 1989『老司古墳』

割畑 1 号：福岡町教育委員会 1999『福岡割畑遺跡』

佐 賀

梅坂 5 号：鳥栖市教育委員会 1986『梅坂古墳群』

熊本山：佐賀県教育委員会 1967「熊本山舟形石棺墓」『帯隈山神籠石とその周辺』

丹坂峠：小城町 1974『小城町史』

塚山：佐賀県 1950「目達原古墳群調査報告」『佐賀県史跡名勝天然記念物』第 9 集

東十郎特別地区Ⅰ号・ロ号：佐賀県教育委員会 1966『東十郎古墳群』、福岡大学人文学部考古学研究室 2003『佐賀県・東十郎古墳群の研究／対馬・サイノヤマ古墳の調査』

熊 本

伝左山：玉名市歴史博物館ころろピア 2013『伝左山古墳出土品図録』

丸山 3 号：熊本県教育委員会 1975『塚原』

大 分

おごもりⅠ区方形周溝墓 4 号石棺：玖珠町教育委員会 1977『おごもり遺跡調査概報』

宮 崎

市の瀬 10 号：田中 茂・岩永 哲夫ほか 1986「市の瀬地下式横穴墓群」『国富町文化財調査資料』第 4 集、宮崎県 1993『宮崎県史』資料編 考古 2

韓 国

京畿道

平澤玄華里Ⅳ-1 地区：忠北大学校先史文化研究所 1996『平澤玄華里遺蹟』

忠清北道

清原米川里古墳群：国立文化財研究所 1995『清原米川里古墳群発掘調査報告書』

忠清南道

天安龍院里 58 号：公州大学校博物館 2000『龍院里古墳群』

全羅北道

完州上雲里古墳群：全北大学校博物館 2010『上雲里Ⅰ～Ⅲ』

全羅南道

務安社倉里：国立光州博物館 1984『靈岩萬樹里古墳群』

慶州北道

慶州皇南大塚北墳：文化財管理局文化財研究所 1985『皇南大塚（北墳）』

慶州金鈴塚：梅原末治 1926『慶州金鈴塚飾履塚発掘調査報告』大正十三年度古蹟調査報告第 1 冊

慶州月山里 A18 号：国立慶州文化財研究所 2003『慶州月山里遺蹟』

慶州徳泉里 4 号：中央文化財研究院 2005『慶州徳泉里古墳群』

慶山新上里カⅡ-45 号：嶺南大学校博物館 2006『慶山新上里遺蹟Ⅱ』

慶山新上里カⅢ-10 号：嶺南大学校博物館 2006『慶山新上里遺蹟Ⅲ』

慶山林堂造永 E1 号：嶺南大学校博物館 2000『慶山林堂地域古墳群Ⅴ』

慶山林堂造永 E2-1 号：嶺南大学校博物館 2015『慶山林堂地域古墳群ⅩⅡ』

慶山林堂 C1-135 号：韓国文化財保護財団 1998『慶山林堂遺蹟（Ⅱ）』

慶山林堂 D2-47 号：韓国文化財保護財団 1998『慶山林堂遺蹟（Ⅵ）』

慶山林堂 D2-182 号：韓国文化財保護財団 1998『慶山林堂遺蹟（Ⅴ）』

大邱時至洞Ⅰ B-61 号：嶺南大学校博物館 1999『時至の文化遺蹟Ⅱ』

大邱時至洞Ⅰ C-15 号：嶺南大学校博物館 1999『時至の文化遺蹟Ⅲ』

大邱時至洞Ⅰ D-145 号：嶺南大学校博物館 1999『時至の文化遺蹟Ⅴ』

大邱旭水洞ナ-9 号：嶺南大学校博物館 2002『大邱旭水洞古墳群』大邱時至洞 39 号：「濱崎 2008」

大邱達城古墳群：朝鮮総督府 1930『大正十二年度古蹟調査報告』第 1 冊

大邱汶陽里 35 号：嶺南文化財研究院 2003『達城汶陽里古墳群Ⅰ』

尚州軒新洞古墳群：慶尚北道文化財研究院 2003『尚州軒新洞古墳群』

浦項鶴川里 196-1 号：慶尚北道文化財研究院 2002『浦項鶴川里遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

亀尾黄桑洞 94 号：[車 2003]

慶尚南道

蔚山大岱里 36 号：蔚山文化財研究院 2006『蔚山大岱里中岱遺蹟』
蔚山早日里（昌）54 号：国立昌原文化財研究所 2000『蔚山早日里
古墳群発掘調査報告書』、蔚山博物館 2013『蔚山鉄文化』
蔚山明山里 38 号墓：蔚山文化財研究院 2011『蔚山明山里遺蹟』
蔚山茶雲洞Ⅱ-12 号：蔚山発展研究院 2005『蔚山茶雲洞Ⅱ区域遺蹟』
蔚山萊泗洞北洞古墳群：蔚山文化財研究院 2013『蔚山萊泗洞北洞
遺蹟Ⅰ～Ⅴ』
蔚山華峰洞 14 号：蔚山発展研究院 2008『蔚山華峰洞遺蹟』
蔚山雲化里 1 号：蔚山発展研究院 2008『蔚山雲化里遺蹟』
昌寧桂城 A-14 号、B39-1 号：釜山大学校博物館 1995『昌寧桂城
古墳群』
昌寧桂城 B-3 号：東亜大学校博物館 1977『昌寧桂城古墳群発掘調
査報告』
昌原大学校博物館 2000『昌原盤溪洞遺蹟Ⅱ』
昌寧桂城Ⅰ-26 号：慶南考古学研究所 2001『昌寧桂城新羅高塚群』
昌寧桂城 89 号：朝鮮總督府 1931『大正十二年度古蹟調査報告』
昌原盤溪洞Ⅰ-24 号：昌原大学校博物館 2000『昌原盤溪洞遺蹟Ⅰ』
陝川玉田 M3 号：慶尚大学校博物館 1990『陝川玉田古墳群Ⅱ』
陝川芋浦里 E5-1 号：釜山大学校博物館 1987『陝川芋浦里 E 地区
遺蹟』
陝川倉里 B-26 号：東亜大学校博物館 1987『陝川倉里古墳群』
梁山北亭里 14 号：沈奉謹 1994「梁山北亭里古墳群」『考古歴史学
誌』第 10 輯 東亜大学校博物館
宜寧礼屯里：慶尚大学校博物館 1994『宜寧礼屯里墳墓群』
密陽月山里 5 号：密陽大学校博物館 2004『密陽月山里墳墓群』
釜山福泉洞 35 号：釜山大学校博物館 2012『福泉洞古墳群Ⅳ』
釜山福泉洞 73 号：福泉博物館 2001『福泉博物館』
金海徳亭里古墳群：[車 2003]
馬山縣洞 64 号：昌原大学校博物館 1990『馬山縣洞遺蹟』
馬山合城洞 9 号：慶南考古学研究所 2007『馬山合城洞遺蹟』
咸安会山里 1 号：[車 2003]
山清玉山里：[車 2003]

図出典

第 206 図 富士市教育委員会作成
第 207 図、第 209 図、第 213 図、第 214 図、第 215 図：筆者作成
第 208 図、第 210 図、第 211 図、第 212 図、第 216 図、第 217 図、
第 218 図：各古墳、遺跡にかかわる文献から引用の上、筆者作
成